

Y a m e
八女市内遺跡群 1 4

福岡県八女市緒玉所在 野田遺跡発掘調査報告書

八女市文化財調査報告書 第122集

2018

八女市教育委員会

Y a m e
八女市内遺跡群 1 4

福岡県八女市緒玉所在 野田遺跡発掘調査報告書

八女市文化財調査報告書 第122集

2018

八女市教育委員会

序

八女市の西部において実施された八女南部県営ほ場整備事業を契機として発掘調査が行われ、おおくの遺跡が知られるようになりました。現在においても埋蔵文化財が多数存在しているものと推察され、これらの保存と周知は八女市が取り組まなければならない重要な課題となっています。

今回の報告は八女南部第二地区県営ほ場整備事業にともない発掘調査された成果を公表するものです。平成元年度に行われた発掘調査について未報告となっていたものを含め再検討を行いました。2000年ほどまえの弥生時代中期から後期を中心とした遺構・遺物が主に見つかっております。とくに群をなすお墓が見つかりました。先人の暮らしぶりを知っていただき、今なお地下にねむる埋蔵文化財に対し、文化財愛護の思いを育んでいただくことを目的としております。

八女南部県営ほ場整備事業により順次刊行してきたものやこの後も順次刊行していく予定の発掘調査報告書が文化財の保護や普及の一助となり、郷土の歴史を知ることを通して今まで以上に郷土愛の心を育むことに寄与できれば幸いです。

最後に、発掘調査や報告書作成にあたりご協力いただきました関係各位、地元の皆さま、ご指導・ご助言いただきました方々に感謝の意を申し上げます。また今後とも文化財行政にご理解とご協力をよろしくお願いいたします。

平成30年3月31日

八女市教育委員会

教育長 西 島 民 生

例言

- ・ 本書は八女市南部第2地区県営圃場整備事業にともなう八女市緒玉字野田に所在する野田遺跡の発掘調査報告書である。
- ・ 発掘調査は八女市教育委員会が実施した。
- ・ 日本測地系の第2系平面直角座標を使用している。X軸の数値が誤っており表記していない。高さは標高で表している。
- ・ 遺構の名称や番号は調査時のものを使用している。新たに整理報告段階で番号を付したものがある。
- ・ 使用した現地測量図は発掘調査時の調査担当を中心として発掘調査の参加者が作成している。本報告では理解補助のため写真を参考に加筆・修正しているところがある。
- ・ 遺物実測図は旧岩戸山歴史資料館において平成9年度に作成したものを本書作成時に再検討し、加筆・修正を加えた。甕棺については平成30年度に実測した。
- ・ 使用した現地写真は調査担当者が撮影している。
- ・ 執筆、編集、遺物の撮影は多賀が行った。
- ・ 発掘調査時の測量図、写真等の記録、出土遺物は八女市教育委員会で収蔵・保管している。有効な活用を望む。
- ・ 第27図1の遺物は平成12年に吉田氏が実測したものをトレースし使用させていだいた。

本文目次

1 調査の経過	1
(1) 調査にいたる経緯	
(2) 調査体制	
2 遺跡の位置と環境	2
3 調査の成果	7
(1) 発掘調査の概要	7
(2) 遺構と遺物	8
(3) 総括	61

插图目次

第 1 图 周边遗迹图····· 3	第 2 图 调查区位置图····· 4
第 3 图 调查区付近等高线图····· 5	第 4 图 遺構配置图····· 7
第 5 图 SB04 実测图 (1/60)····· 8	第 6 图 SB05 実测图 (1/60)····· 9
第 7 图 SB01 実测图 (1/60)····· 10	第 8 图 SB02 実测图 (1/60)····· 10
第 9 图 SB03 実测图 (1/60)····· 11	
第 10 图 SK01・02・03 実测图 (1/40)····· 12	
第 11 图 SK24・25 実测图 (1/40)····· 12	
第 12 图 SB03 SK01・02・03・24・25 遺物実测图 (1/4)····· 13	
第 13 图 SX01・SD01・02 実测图 (1/40)····· 14	
第 14 图 SD01 上層遺物実测图 (1/4)····· 16	
第 15 图 SD01 下層 SD01・02 遺物実测图 (1/4)····· 16	
第 16 图 P 14・25 遺物実测图 (1/4)····· 17	
第 17 图 墓群配置图 (1/150)····· 18	
第 18 图 47 号墓実测图 (1/40)····· 19	
第 19 图 06・48 号墓実测图 (1/40)····· 19	
第 20 图 19・60 号墓実测图 (1/40)····· 20	
第 21 图 45 号墓実测图 (1/40)····· 21	
第 22 图 45 号墓上層遺物実测图 (1/4)····· 21	
第 23 图 12 号墓実测图 (1/40)····· 22	
第 24 图 01・08・14・27 号墓実测图 (1/40)····· 23	
第 25 图 02 号墓実测图 (1/40)····· 24	
第 26 图 37・38・41・42 号墓実测图 (1/40)····· 24	
第 27 图 32・33 号墓・遺物実测图 (1/40 1/4)····· 25	
第 28 图 05・09・11・44・49・53・57 号墓実测图 (1/40)····· 27	
第 29 图 04・16・23・34・36・43・58・59 号墓実测图 (1/40)····· 28	
第 30 图 SK14・15・16・18・19・22・23・26・27 実测图 (1/40)····· 31	
第 31 图 SK04・05・06 実测图 (1/40)····· 32	
第 32 图 03 号墓実测图 (1/40)····· 33	第 33 图 03 号墓甕棺実测图 (1/8)····· 33
第 34 图 13 号墓実测图 (1/40)····· 34	第 35 图 24 号墓実测图 (1/40)····· 34
第 36 图 13 号墓甕棺実测图 (1/8)····· 35	第 37 图 24 号墓甕棺実测图 (1/8)····· 36
第 38 图 28 号墓実测图 (1/40)····· 37	第 39 图 28 号墓甕棺実测图 (1/8)····· 37
第 40 图 30・31 号墓実测图 (1/40)····· 38	第 41 图 30 号墓甕棺実测图 (1/8)····· 38
第 42 图 51 号墓実测图 (1/40)····· 39	第 43 图 51 号墓甕棺実测图 (1/8)····· 39
第 44 图 55 号墓実测图 (1/40)····· 40	第 45 图 55 号墓甕棺実测图 (1/8)····· 40
第 46 图 15 号墓実测图 (1/40)····· 41	第 47 图 15 号墓甕棺実测图 (1/8)····· 41

第 48 図	17 号墓実測図 (1/40)·····	42	第 49 図	17 号墓甕棺実測図 (1/8)·····	42
第 50 図	20 号墓実測図 (1/40)·····	43	第 51 図	20 号墓甕棺実測図 (1/8)·····	43
第 52 図	22 号墓実測図 (1/40)·····	43	第 53 図	22 号墓甕棺実測図 (1/8)·····	43
第 54 図	29 号墓実測図 (1/40)·····	44	第 55 図	29 号墓甕棺実測図 (1/8)·····	44
第 56 図	39 号墓実測図 (1/40)·····	45	第 57 図	39 号墓甕棺実測図 (1/8)·····	45
第 58 図	40 号墓実測図 (1/40)·····	46	第 59 図	40 号墓甕棺実測図 (1/8)·····	46
第 60 図	46 号墓実測図 (1/40)·····	46	第 61 図	46 号墓甕棺実測図 (1/8)·····	46
第 62 図	07 号墓実測図 (1/40)·····	47	第 63 図	07 号墓甕棺実測図 (1/8)·····	47
第 64 図	18 号墓実測図 (1/40)·····	48	第 65 図	18 号墓甕棺実測図 (1/8)·····	49
第 66 図	26 号墓実測図 (1/40)·····	50	第 67 図	26 号墓甕棺実測図 (1/8)·····	50
第 68 図	35 号墓実測図 (1/40)·····	50	第 69 図	35 号墓甕棺実測図 (1/8)·····	50
第 70 図	54 号墓実測図 (1/40)·····	51	第 71 図	54 号墓甕棺実測図 (1/8)·····	52
第 72 図	56 号墓実測図 (1/40)·····	53	第 73 図	56 号墓甕棺実測図 (1/8)·····	53
第 74 図	10 号墓実測図 (1/40)·····	53	第 75 図	10 号墓甕棺実測図 (1/8)·····	53
第 76 図	21 号墓実測図 (1/40)·····	54	第 77 図	21 号墓甕棺実測図 (1/8)·····	54
第 78 図	25 号墓実測図 (1/40)·····	54	第 79 図	25 号墓甕棺実測図 (1/8)·····	54
第 80 図	52 号墓実測図 (1/40)·····	54	第 81 図	52 号墓甕棺実測図 (1/8)·····	55
第 82 図	SK20 実測図 (1/40)·····	56	第 83 図	SK20 甕棺実測図 (1/8)·····	56
第 84 図	50 号墓・甕棺実測図 (1/40 1/8)·····	57			
第 85 図	59 号墓甕棺実測図 (1/8)·····	57			
第 86 図	遺構不明甕棺実測図 (1/8)·····	57			
第 87 図	03・14・20 号墓遺物実測図 (1/2 1/4)·····	57			
第 88 図	SK08・09・17・21 実測図 (1/40)·····	58			
第 89 図	SK08・17・21 遺物実測図 (1/4)·····	59			
第 90 図	SK07・10・11・12・13 実測図 (1/40)·····	60			
第 91 図	甕棺形式分布図·····	62			
第 92 図	墓群域方位分類図·····	63			

表目次

表 1	遺構一覽表 1-4·····	66-69
表 2	遺物觀察表 1-3·····	70-72

図版目次

図版 1	·····	74
1. 調査地全景	2. 調査区全景	

図版 2	1. 調査区全景	2. 調査区全景西側	3. SB04	4. SB05 周辺	75
	5. SB01	6. SB02	7. SK03	8. SB02 地下断面	
図版 3	1. SK01	2. SK01 断面	3. SK02	4. SK02 断面	76
	5. SK25	6. SK24	7. SX01	8. SD01 断面 B-B'	
図版 4	1. 墓群	2. 墓群	3. 60・10・12 号墓	4. 60 号墓断面	77
	5. 12 号墓断面	6. 45 号墓	7. 01 号墓	8. 01 号墓断面	
図版 5	1. 47 号墓石蓋	2. 48 号墓石蓋	3. 32 号墓		78
図版 6	1. 47 号墓石棺	2. 47 号墓東小口	3. 48 号墓	4. 48 号墓赤色顔料	79
	5. 32 号墓鉛銚	6. 19 号墓	7. 06 号墓赤色顔料	8. 06 号墓断面	
図版 7	1. 14 号墓	2. 14 号墓石鏃	3. 27 号墓	4. 27 号墓西小口	80
	5. 08・09 号墓	6. 02 号墓	7. 38 号墓	8. 43・42・41 号墓・SB03	
図版 8	1. 11 号墓	2. 44 号墓	3. 49 号墓・SK17	4. 53 号墓	81
	5. 57 号墓	6. 05・04 号墓	7. 23・59 号墓	8. 37・36 号墓	
図版 9	1. 58 号墓	2. SK14	3. SK23・15	4. SK16	82
	5. SK19	6. SK22	7. SK04	8. SK05	
図版 10	1. SK06	2. 03 号墓	3. 13 号墓	4. 24 号墓	83
	5. 28 号墓	6. 30・31 号墓	7. 51 号墓	8. 55 号墓	
図版 11	1. 15 号墓	2. 17・16 号墓	3. 20 号墓	4. 22 号墓	84
	5. 29 号墓	6. 39 号墓	7. 40 号墓	8. 46 号墓	
図版 12	1. 07 号墓	2. 18 号墓	3. 26 号墓	4. 34・35 号墓	85
	5. 54 号墓	6. 56 号墓	7. 21 号墓	8. 25 号墓	
図版 13	1. 52 号墓	2. SK20	3. 50 号墓・SK18	4. SK08・09	86
	5. SK21	6. SK10	7. SK11	8. SK13	
図版 14 - 19 遺物					87 - 92

1 調査の経過

(1) 調査にいたる経緯

昭和57年度より八女南部第一地区県営圃場整備事業が実施された。引き続いて三河地区全域の農用地を対象に八女南部第二地区県営圃場整備事業が昭和63年度に始まり、これを受けて八女市教育委員会と八女南部土地改良区が協議を行った。事前調査の結果、遺跡が広範囲に及ぶことが分かった。そこで圃場整備により土地が削平・掘削を受ける箇所において遺跡の記録保存を目的として発掘調査を行い、削平・掘削を受けない箇所においては現状保存されることになった。

当遺跡では平成2年度に国庫補助事業として発掘調査を行った。緒玉と酒井田の集落の間では同様に京田遺跡・宮ノ前遺跡・水洗遺跡・石町遺跡・深田遺跡・池上遺跡の発掘調査が行われた。

(2) 調査体制

【平成2年度】（現地調査時）

（調査主体）

八女市教育委員会

	教育長	坂田 不二夫
社会教育課	課長	小野 勝輝
同	課長補佐	大月 重信
同	係長	下川 文比古
同	係員	梅野 満、井手 勇一、平嶋 芳子、赤崎 敏男
同	嘱託	鹿田 昌宏

【平成28年度】（整理作業・報告書作成・刊行）

（調査主体）

八女市教育委員会

教育長 西島 民生

（調査統括）

八女市役所（新社会推進部文化振興課 文化財保護係）

新社会推進部	部長	松尾 一秋
文化振興課	課長	持丸 末喜
文化財保護係	係長	中川 寿賀子（調査統括）
同	係員	永田 寧（整理・報告書担当）
		檀 佳克
		渡部 真弓
		甲斐 郁
	嘱託	多賀 晴司（本報告担当）

2 遺跡の位置と環境

八女市は福岡県南部に位置している。平成18年に上陽町、平成22年に立花町、黒木町、星野村、矢部村との合併により、県下で2番目に広い自治体となった。東は大分県日田市と南は熊本県山鹿市と接している。北に耳縄山地、八女丘陵、東に釈迦ヶ岳山地、南に筑肥山地に囲まれ、矢部川水系の上流域から中流域に及ぶ。東の山間部では林業のほか文化的景観としての棚田がみられ、中山間部から段丘部で茶畑が広がるさまは整美である。段丘上や低地では稲作のほかいちご・なし・ぶどうなどの果実の栽培や、とくに電照菊をはじめとした菊の生産が盛んである。当遺跡と周囲では現在水田、ビニールハウスが広がっている。

当遺跡は大字緒玉字野田にある。花宗用水と矢部川にはさまれた地域は全体として南西に傾斜する地勢で、当地は地形上では自然堤防に分類されている。西にある緒玉の集落と、南の二反田遺跡、宮ノ前遺跡、東から南東の酒井田集落も同様に自然堤防に分類されている（『八女市史』上巻）。第3図は圃場整備前の昭和40年測量の1:2500八女市都市計画基礎図に等高線をトレースしたものである。道路や用水によると思われる出入り部分は省略している。『八女市南部地区県営圃場整備地内埋蔵文化財調査報告書1』八女市文化財調査報告書 第71集（以下、八女市文化財調査報告書についてはシリーズ番号のみ記す）の図版2は圃場整備前の1981年の空中写真であわせて参照いただきたい。当遺跡や二反田遺跡、水洗遺跡と緒玉の集落の間に標高が低い水田が連なり谷状になっている。この谷状の低地は深田遺跡の北方約250mを東に向け通り緒玉の集落の東側で大きく曲り南下し、南西に向きを変え宿町遺跡の北西を抜けている。圃場整備後の現在でも水洗遺跡付近から緒玉の集落をみると明らかに一段高い状況がわかる。

また当調査区と二反田遺跡の間も同様に谷状の低地となっている。かみ手は深田遺跡と京田遺跡1次、2次の間を通るのか、京田遺跡1次、2次の南を通るのか、ともに低地から続く用水が流れているため分かりづらい。等高線から南に通ると考えられようか。調査区の南西で谷状の低地は合流し、調査区は低地にはさまれた高まりの先端部に位置している。標高差が1.5m程度あり等高線の間隔が狭く、低地からみると尾根状の段丘あるいは台地の先端といった光景が想像される。





- | | | | | | |
|-----------|-----------|-----------|-----------|------------|--------------|
| 1. 野田遺跡 | 3. 深田遺跡 | 4. 京町遺跡 | 5. 二反田遺跡 | 6. 宮ノ前遺跡 | 7. 水洗遺跡 |
| 2. 池上遺跡 | 9. 打越遺跡 | 10. 袴田遺跡 | 11. 鳥井遺跡 | 12. 石町遺跡 | 13. 三河小学校庭遺跡 |
| 8. 宿町遺跡 | 15. 新替遺跡 | 16. 大坪遺跡 | 17. アモメ遺跡 | 18. 松ノ本遺跡 | 19. 茶ノ木ノ本遺跡 |
| 14. 国伏遺跡 | 21. 曲松遺跡 | 22. 北小路遺跡 | 23. 龜ノ甲遺跡 | 24. 西山ノ上遺跡 | 25. 大坪・前田遺跡 |
| 20. 橋町遺跡 | 27. 岩戸山古墳 | 28. 辻の西遺跡 | 29. 西原遺跡 | 30. 熊野遺跡 | 31. 新庄・六反田遺跡 |
| 26. 岩崎遺跡群 | | | | | |

第1図 周辺遺跡図

南東に約 500 m の宿町遺跡は扇状平野に分類されている。弥生時代前期後半から中期前葉の竪穴建物・貯蔵穴のほか径約 40 m の一重環壕が見つかった。生産物貯蔵を主目的とした環壕とは考えにくい状況があり、その他の造営要素を考慮する必要性が述べられている（第 111 集）。八女市では同時期の環壕は亀ノ甲遺跡、立野・大坪遺跡にある。

当調査区の東側にある深田遺跡と京田遺跡 1－3 次は弥生時代後期から古墳時代と奈良時代の遺跡で、竪穴建物が 64 軒、掘立柱建物が 10 棟と奈良時代ではそれぞれ 62 軒、2 棟発見されている。深田遺跡から方形環壕が見つかった。規模が東西 70 m 南北 60 m、四隅と東西辺に突出部を有する。古墳時代前期中葉が環壕の埋没開始期と考えられている。方形環壕の周囲には同時期の竪穴建物が存在しなくなることが特徴的である。調査区から 50 m の至近距離である。（第 71 集）。



第 2 図 調査区位置図



第3図 調査区付近等高線図

南には谷状の低地をはさんで二反田遺跡、宮ノ前遺跡、水洗遺跡がある。二反田遺跡、宮ノ前遺跡は弥生時代中期から古墳時代前期を中心とした遺跡で調査区全域に竪穴建物が広がる。両遺跡で200軒ちかい竪穴建物のほか掘立柱建物や土坑など非常に多くの遺構が確認された。継続した同一の集落と考えられている。宮ノ前遺跡のSB14 竪穴建物内の土坑から多量の投弾状土製品がまとまって出土している(第113集、第117集)。水洗遺跡ではほかに弥生時代前期末から中期初頭の遺構を含み、遺構は全体として比較的散漫に見つかっている(第120集)。

当遺跡から南東へ約400mのところに光明寺廃寺跡の南に隣接する石町遺跡があり、弥生時代と考えられている貯蔵穴群と古代の掘立柱建物が見つかっている。貯蔵穴には炭化米が詰まって出土したものがある。掘立柱建物は大型のものを含んでいる(第118集)。

谷状の低地の西側の池上遺跡は当調査区の北方約200mにある。歴史時代の建物が多く見つかり、弥生時代の遺構や下層から縄文時代の押型文土器が出土している円形竪穴遺構が5基発見されている(第23集)。

袴田遺跡は当遺跡から北西に約400m、緒玉の集落をこえた地点にある。時期が7世紀後半から9世紀前半を中心とする遺跡で竪穴建物、掘立柱建物、土坑が見つかり、カマドをもつ竪穴建物のSB07から墨書土器が出土している。弥生時代後期から古墳時代前半の遺構も少ないながら見つかり、(第107集)。

この地域は弥生時代から古墳時代前期と古代前半を中心とする遺跡がおおく、順次調査報告書が発刊され、この地域の人々の活動を垣間見ることが徐々にできるようになっている。

報告書

- 八女市教育委員会 1992『八女市南部地区県営圃場整備事業地内 埋蔵文化財調査概報3 福岡県八女市大字酒井田・緒玉所在遺跡の調査概報』八女市文化財調査報告書 第23集
- 2005『八女市南部地区県営圃場整備事業地内埋蔵文化財調査報告書 1 福岡県八女市南部地区所在遺跡の調査報告書』八女市文化財調査報告書 第71集
- 2015『八女市内遺跡群4 福岡県八女市新庄・国武・緒玉所在遺跡の発掘調査報告書』八女市文化財調査報告書 第107集
- 2016『八女市内遺跡群7 福岡県八女市緒玉所在遺跡の発掘調査報告書』八女市文化財調査報告書 第111集
- 2016『八女市内遺跡群9 福岡県八女市酒井田所在 二反田遺跡発掘調査報告書』八女市文化財調査報告書 第113集
- 2017『八女市内遺跡群10 福岡県八女市酒井田所在 宮ノ前遺跡発掘調査報告書』八女市文化財調査報告書 第117集
- 2017『八女市内遺跡群11 福岡県八女市酒井田所在遺跡の調査報告書』八女市文化財調査報告書 第118集
- 2017『八女市内遺跡群13 福岡県八女市緒玉所在 水洗遺跡発掘調査報告書』八女市文化財調査報告書 第120集

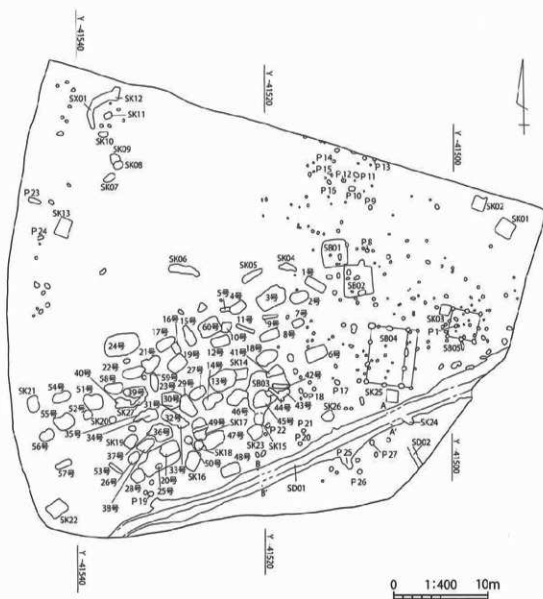
3 調査の成果

(1) 発掘調査の概要

当調査区は八女市西部の八女市緒玉字野田にあり字名が由来となる野田遺跡である。八女市教育委員会により八女南部第二地区県営圃場整備事業に伴う発掘調査が行われた。調査期間は平成元年11月19日から平成2年1月18日までである。調査面積は約2200m²である。

遺構検出面は1面で、高さは北辺で標高24.2mである。SD01の北岸の東が24.1m、中央で24.0m、西端は23.5mと中央付近から低くなる。南辺は東が23.4m、中央は23.6m、西辺は北部が24.1m、中央で23.8m、SK22のある南隅は23.3mと最も低い。概ね南西方向に標高を減じ中央付近からより強く低くなり、南はSD01に沿って低くなる。

発掘調査の結果、弥生時代中期から古墳時代前期の墓群（箱式石棺墓1基、石蓋土墳墓

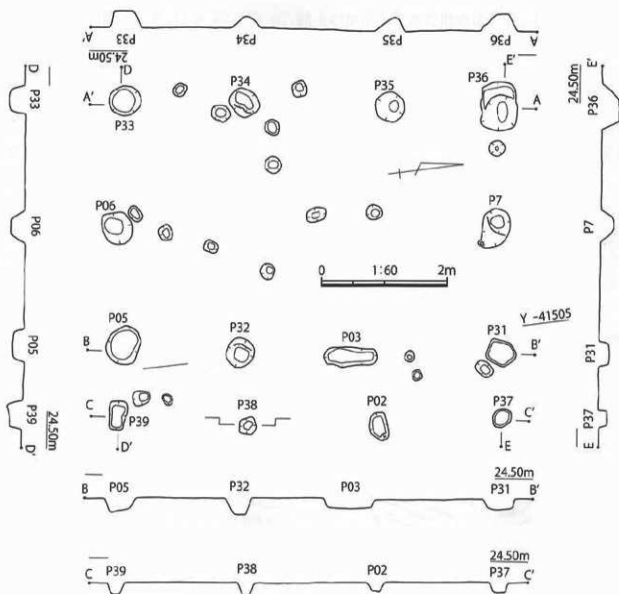


第4図 遺構配置図

2基、甕棺墓28基、木棺墓、木蓋土墳墓の可能性のあるものを含め土墳墓30基の計61基が見つかった。中でも32号墓から鉛製の銚が出土している。同時期でほかに土坑が4基、円形周溝状遺構?が1基見つかった。弥生時代中期から古代の溝1条、古代の掘立柱建物2棟、竪穴建物2軒、土坑5基、時期不詳の土坑20基、溝状遺構1条、ほか多数の小穴、落ち込みが確認された。

(2) 遺構と遺物

平面直角座標うちX座標の値が地形図と合わないためY座標のみを遺構図に載せている。整理、保管の混乱を避けるため調査時の遺構番号をそのまま使用しており、遺構種別略称と遺構の種類が合わないものがある。また、遺構種類を変更したものについては本文に理由を記載する。記述は時期別、遺構種別とし、時期が不明のものは地点別としている。遺構一覧を表1、遺物観察表を表2として総括のあとに載せている。



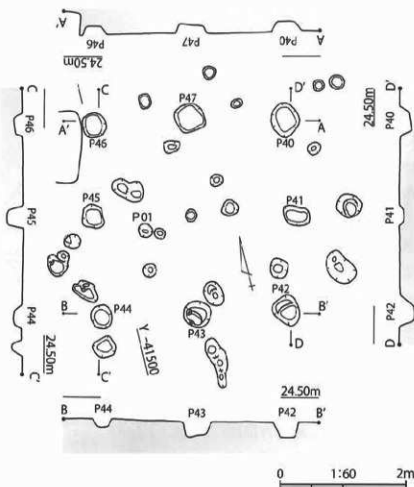
第5図 SB04 実測図 (1/60)

SB04 (第5図 図版2の3)

調査区東半の中央にある東に1間底の桁行3間×梁行2間の掘立柱建物である。遺構番号はついていなかったが白線を入れた写真が撮られているため調査時には認識されていたものである。P31番以降は遺構番号を新たに付けた。桁行を南北に沿わせている。桁の間隔は1.92m-2.28m-1.92m、梁の間隔は1.92mである。桁の中央が広くなると考えられる。P03はほかの柱穴に対してずれており、また小さく浅いためSB04の柱穴ではない可能性が高く、P31とP32の間に柱穴はない。底は東側桁から1.11mの間隔である。調査時に底はSB04に含めていなかったが配置が整合的であるため整理段階でSB04とした。身舎は中央の柱間が広がるが底は等間隔で2.04mとなっている。また身舎の柱穴が径0.5m前後に対して底の柱穴は0.3m前後ではっきりと小さい。周囲にある小穴と規模が変わらず、加えて間隔が桁行と異なり等間隔で1.08mと狭いため、底ではなく裳階等を考える必要があるかもしれない。遺物は出土していない。調査区の東にはSD01をのぞき古代の遺構のみが存在し弥生時代の遺構がないことから古代の遺構と考えてよからう。また、時期が分かる古代の遺構は8世紀で、また調査区全体からも9世紀以降と考えられる遺物の出土がないことからSB04は8世紀の遺構の可能性が高い。

SB05 (第6図 図版2の4)

調査区東端の中央にある2間四方の掘立柱建物である。調査時には掘立柱建物ととらえられておらず、周囲に同程度の規模がある小穴が多いがピットの並びが整合的であるため掘立柱建物とした。近くからの写真は無いが柱穴の並びは確認できる。新たに遺構番号を付した。柱間の間隔は1.53mで辺はおおむね方位に沿っている。柱穴は径0.4m前後のものが多い。P41は深さがほかになんべや浅い。遺物は出土していないが、SB04と同様の理由で遺構の時期は8世紀と考える。

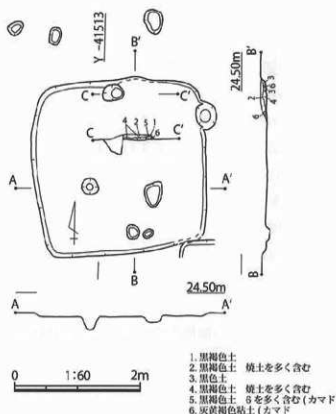


第6図 SB05 実測図 (1/60)

SB01

(第7図 図版2の5)

調査区中央の北東よりにあるカマドを有する竪穴建物である。1辺が2.8mの方形でわずかに東辺が短い。軸は方位に沿い、北辺に中央からやや東にずれた位置にカマドがつく。カマドの基部と考えられる部分が断面C-C'の5、6である。4が使用時堆積層と考えられようか。主柱穴は断面A-A'にかかる2本の可能性がある。間隔が1.1m、竪穴の辺から0.8m離れている。カマドの西側の小穴はSB01を切るため、主柱穴としたものもSB01と関係がない可能性もある。ごくわずかであるがSB02に切られている。図示できる遺物の出土はなく時期が不明である。辺にカマドをもち3mに満たない大きさ、他遺構の時期と分布から8世紀と推定する。

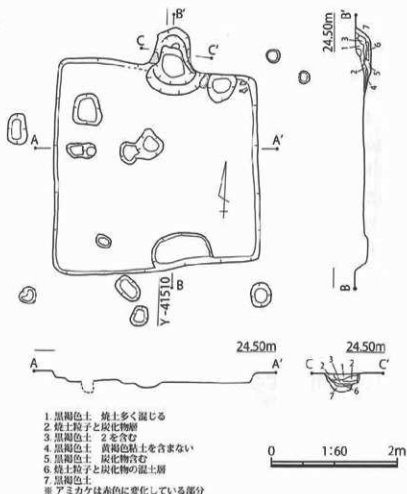


第7図 SB01 実測図 (1/60)

SB02

(第8図 図版2の6、8)

調査区中央の北東よりにあるカマドを有する竪穴建物である。東辺2.9m、西辺3.4m、東西方向が3.2mの東辺が短い台形であるが全体として方形といえる。軸は方位に沿い、北辺中央からわずかに東によってカマドがつく。北辺から北側に出たところの両



第8図 SB02 実測図 (1/60)

側は土が赤色に変色し焼けており、カマドの内部の幅は約0.5 mと考えられる。断面C-C'の2は焼土と炭化物の集積層で3を含め使用時堆積と考えられる。小穴は内外に広がるため付属する遺構を特定できず、南辺の落ち込みは土坑か掘形に伴うものか判断できない。遺構の時期を示す遺物は出土していないが、SB01を切ることで、調査区で9世紀の遺物が出土していないことから8世紀の遺構と推定する。

SB03 (第9図 図版7の8 遺物 第12図1, 2)

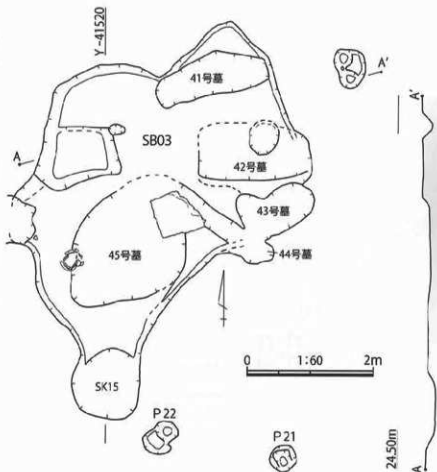
調査区中央の南よりにある。周囲に遺構が多くそれらは弥生時代の遺構で切っているものと考えられるが、遺構範囲分らないため遺構の形状が不明である。SBの略称を付けていることから掘削段階では竪穴建物として認識されている。45号墓の西にある遺物は高坏の坏部がほぼ残っているためその深さからこれより南には広がらず、45号墓と43号墓にまたがる隣の西隅の高さからこれをこえることはないものと思われる。竪穴建物とすれば南北2.7 m、東西2.4 m以下の大きさが考えられる。北西隅の形状や西辺の土坑状の落ち込みが推定する竪穴に比して大きいことから遺構の種類は竪穴建物?としておきたい。

第12図の1, 2が出土している。1は須恵器の坏蓋の口縁部片で器高が高めである。胎土に砂が比較的多く入る。2は弥生時代の甕の口縁部小片で孔が開けられ丹塗される。遺構の時期を決めるには遺物が少ないが1から8世紀の遺構と考えておきたい。

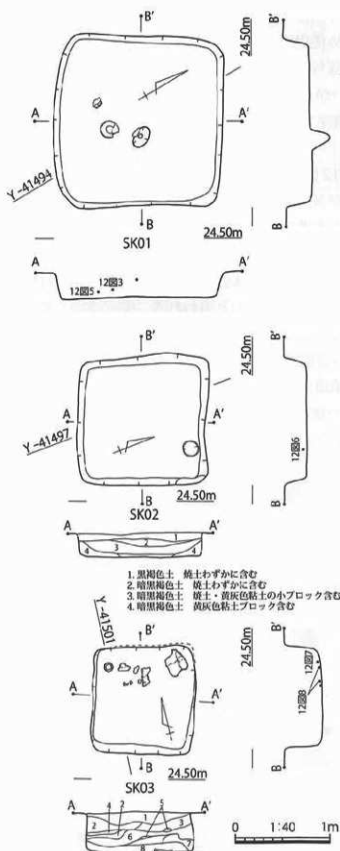
SK01・02・03・25 (第10, 11図 図版2の7 3の1-5 遺物 第12図3-8 11-13)

方形の土坑でまっすぐに掘り下げられている。SK25は底に丸みがあるがほかは平坦である。

SK01は調査区の北東隅にある。一辺1.8 m、深さが0.3 mの大きさである。第12図3-5の遺物が出土した。3と5は土坑の南より、底からやや浮いた位置から出土している。3は土師器の坏で口縁に欠けがあるほかは完形である。低い高台から斜めにまっすぐ立ち



第9図 SB03 実測図 (1/60)



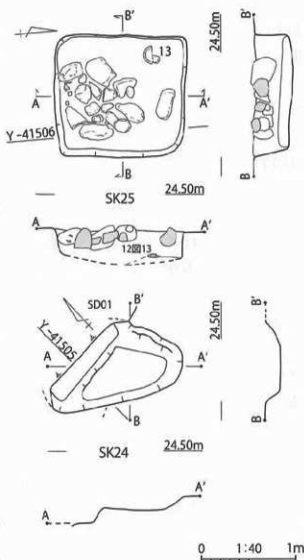
1. 黒褐色土 焼土わずかに含む
2. 暗黒褐色土 焼土わずかに含む
3. 暗黒褐色土 灰土・黄灰色粘土の小ブロック含む
4. 暗黒褐色土 黄灰色粘土ブロック含む

1. 淡黒褐色土 黄灰色粘土まじる
2. 黄灰色粘土と黒褐色土の混土層
3. 黒褐色土 焼土混じる
4. 黒褐色土 黄褐色粘土がわずかにまじる
5. 黄灰色粘土
6. 黒褐色土 焼土わずかにまじる
7. 黄褐色粘土 黒褐色土まじる
8. 黒褐色土 黄灰色粘土がわずかにまじる

第10図 SK01・02・03 実測図 (1/40)

あがる器形で、下部から高台、底は回転ヘラケズリされている。4は須恵器の坏身の小片である。5は須恵器の皿で口縁部は4分の3残っている。ゆるく湾曲する底から斜めにまっすぐ立ち上がり、口縁は外にやや反る器形で、口縁端部は面となっているところが多い。器表の摩耗が著しい。底はヘラキリの可能性がある。

SK02は調査区の北東隅、SK01の北西にある。一辺が1.4m、深さが0.2mの大きさである。第12図6の土師器の蓋が北辺のほぼ底からつまみを下に



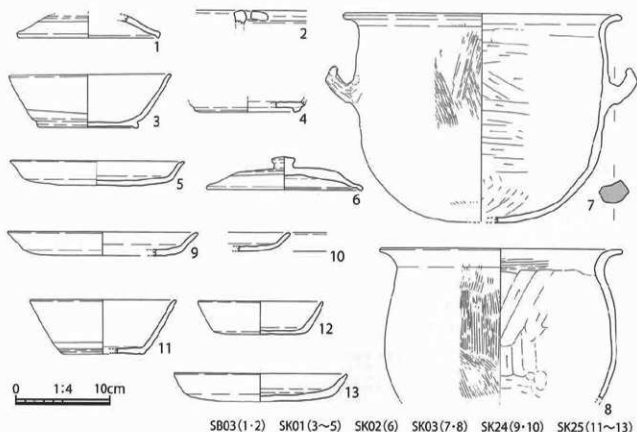
第11図 SK24・25 実測図 (1/40)

した状態で出土している。つまみは幅 2.5cm の大きさと器壁は厚く、天井部上面は回転ヘラケズリされ口縁端部は丸くにぶい。器表の残りはよくない。

SK03 は調査区東部の中央、SB05 の西にある。一辺 1.1 m、深さは 0.4 m の規模である。第 12 図 7、8 が土坑の北によって底から出土している。ともに土師器の鍋である。口縁は端部が水平になるまで強く曲り、ゆるく膨らんだ胴から丸く浅い底部となる。7 は口径が 27.4 - 29.4cm で取手がつくほうの径が広い楕円形である。外面のハケメの目は太く粗い。底部の調整は工具によるナデのところが多し。全体として約 2 分の 1 の残存である。8 は口径 24.4 - 25.8cm で楕円形をしている。取手はつかないが口縁から 14cm 程度から曲りが強くなることから鍋とした。底部は残存していない。

SK25 は調査区東半の南より、SB04 の南にある。南北 1.4 m、東西 1.3 m、深さは 0.4 m の大きさである。底は南北方向にたわむように中央が低い。底から 0.2 - 0.3 m 離れた位置から礫が敷かれたように出土した。検出面ですでに露出していたと考えられ、面として敷かれていたかは不明である。第 12 図 11 - 13 の土器が出土している。13 は須恵器の皿でゆるく丸みがある底から斜めにまっすぐ立ち上がる器形で口縁端部はにぶくとなる。底部はヘラキリで、端部の残りがよくない。土坑の北西隅付近から底に接して上向きに出土している。11 は土師器の坏で底部は回転ヘラケズリされている。12 はやや褐色みがある色調で底部はヘラキリである。

SK01・02・03・25 は出土している遺物から時期が 8 世紀の遺構と考えられる。遺構の性



第 12 図 SB03 SK01・02・03・24・25 遺物実測図 (1/4)

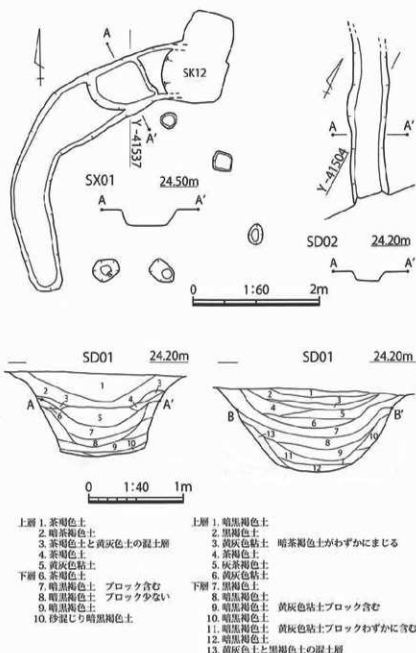
格は特定しがたいが、方形にまっすぐ掘られた形状や、遺物が底あるいは底付近から完形または一部欠損し、1、2点で出土していることから考えて、祭祀土坑や廃棄土坑というよりも貯蔵穴等のその他の遺構の可能性が強いかと推測する。

SK 24 (第11図 図版3の6 遺物 第12図9、10)

調査区の東半南部にあり、SD01を切る土坑である。北側の形状は不明である。SD01を切る部分は一段低くなる。途中まで地山を追いかけて掘られたものであろうか。第12図9、10が出土している。ともに須恵器の皿で9は口縁が3分の1の残存、10は小片である。ともに器表は摩耗している。SD01が少なくとも検出面の高さまで埋まった以後の遺構であることから時期は8世紀以降を想定したい。

SD 01 (第13図 図版3の8 遺物 第14.15図1-12)

調査区の南東部を東北東から西南西に貫流する溝である。ほぼ直線にはしり、西端は南西に向きを変える。底の高さは東が標高23.3m、中央付近は23.2m、西は23.1mと東から西へおおむね低くなる。検出面からの深さはそれぞれ約0.6m、0.9m、0.4mである。掘形は逆台形で、段丘状の高まりから谷状の低地に落ち始める位置に掘削されている。断面中位にある断面A-A'の5、断面B-B'の6は黄灰色粘土が0.1-0.2mの厚みで堆積しており、これを含め上が上層、これより下が下層として遺物を取り分けている。この層は土壌化していない、または非常に弱いと思われる短期間に堆積したものと考えられる。この層より上位はおおむね孤状に堆積しており、自然に埋まっていった



第13図 SX01・SD01・02実測図(1/40)

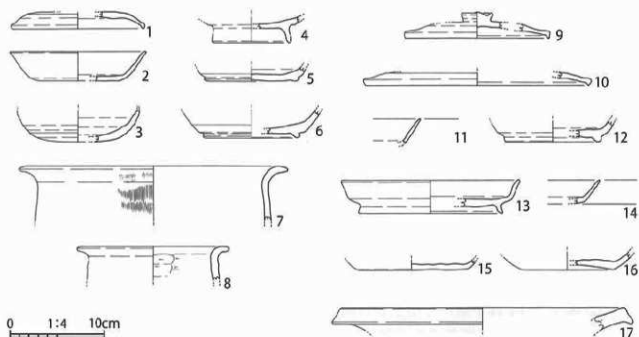
と考えられる。下層の断面A-A'の6-8、断面B-B'の7-9は堆積状況から掘り直された後の堆積と思われる。下層は地山由来と思われる黄灰色粘土ブロックを含む層が挟まるためこれらの層は人為的に埋められた可能性がある。断面A-A'の10、断面B-B'の12は最も古い機能時の堆積、断面B-B'の13は加工時の堆積と思われる。

第14図は上層から出土した遺物である。いずれも小さな破片である。1-6は土師器の坏と蓋である。1は坏の蓋で、須恵器と同様の色調の部分もあるが内面に橙色の部分があり土師器とした。摩耗のため調整は不明瞭である。2は浅い坏で底部調整は不明である。3は丸みが強く底の中央を欠くなど残存が悪く、反転復元しているが精度は低い。4は椀とすべきかもしれない。高い高台がつき、高台の貼り付け前に沈線を入れる。高台をのぞき摩耗のため調整は不明である。5と6は低い高台をもつ坏の底部である。外面底部は回転ヘラケズリされる。7と8は甕である。7は甕としては胎土に砂のまじりが少ない。9-12は須恵器の坏蓋、坏身である。9はつまみ部分と口縁部分は接合しないが胎土が他に比べ白く色調や降りものの状況から同一個体と考えられる。つまみは丁寧な整形で、円錐形に縁がついたような形状である。10は外面の回転ヘラケズリの範囲が広い。11はほかの須恵器に比べ胎土に砂がまじる。12は摩耗が著しい。13-15は須恵器の皿である。13は高台貼り付け前に沈線を入れている。外面底の調整は回転ヘラケズリである。16は須恵器の甕で、外面底部の回転ヘラケズリ、回転ナデの仕上がりがよい。17は弥生時代後期の甕の口縁部で内外面に丹塗される。

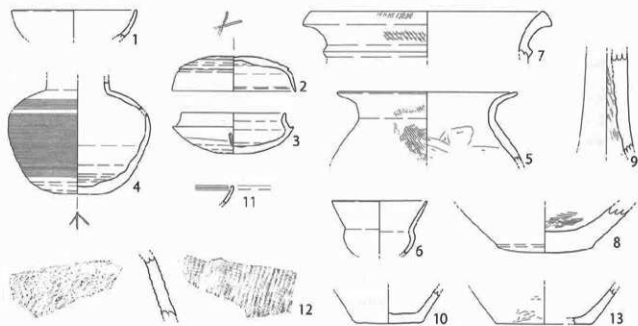
第15図1-11は下層から出土した遺物である。1は土師器の坏で、丸底になると思われる。2は須恵器の坏蓋で外面肩部に深い沈線状の段、口縁端部に段をもつ。天井に「×」のヘラ記号がつけられ、回転ヘラケズリの範囲が狭い。3は須恵器の坏身である。受けが小さい印象を受ける。外面の回転ヘラケズリの中心が大きくずれている。外面受けからやや下にヘラ記号を入れる。2本線だが1本は浅く引っ掻いたような線である。4は須恵器の甕である。外面底の中心から1.8cm離れてやねに縦線のヘラ記号を入れている。縦線が先に描かれている。頸部片と接点はないが焼きや形状から同一個体とみなすことができる。5は古式土師器の甕である。胎土に大きな礫が目立つ。内面のヘラケズリは頸部付近まで及んでいるところは少ない。6は古式土師器の小型で丸底の甕である。胎土は精良ではない。7-10は弥生土器である。7は甕の口縁部である。口縁端部のハケメは押し当てたようなものだが摩耗もあり加飾的なものか判断できない。8は甕の底部である。外面底はわずかに突出し丸く湾曲している。厚みから大きな個体になるものと思われ、北に分布する墓群の甕棺の一部の可能性も十分考えられる。9は高坏の脚部で、摩耗のため丹塗はわずかに残るのみである。内面のしぼり痕はらせん状で深く明瞭である。10は甕の底部で胎土に角閃石が目立つ。丹塗は摩耗により残っていないところ多い。11は近世の染付の口縁部小片で、内面に2本の圈線が入る。おそらく混入したものと思われる。

第15図12は上層下層の区別がない遺物である。須恵器の甕の胴部片で、内面に湾曲が強くなる部分があり頸部の近くの可能性もある。

以上の遺物から、上層は8世紀ころの遺物が中心でその時期以降に堆積し、下層は遺物点数が少なく人為的に埋めた可能性がある層をはさむが、弥生時代中期から古墳時代後期遺物が出土しているため上層の時期をかながみ弥生時代中期から8世紀の堆積と考えておきたい。上層は掘り直しと考えられる層はないが、少なくとも溝状のくぼみはあったと考えられ、同時期の遺構が存在することから SD01 は弥生時代中期から8世紀以降まで長期にわたり機能していたと思われる。



第14図 SD01 上層遺物実測図(1/4)



SD01下層(1~11) SD01(12) SD02(13)

第15図 SD01 下層 SD01・02 遺物実測図(1/4)

SD02 (第13図 遺物 第15図13)

調査区東半の南隅にある。溝状遺構で南は調査区の外へ続く。北は削られたと思われる途切れる。SD01と直行する配置にあるが、第15図13の弥生土器の甕底部片のみであり時期を想定することができず関係を明らかにすることはできない。

SX01 (第13図 図版3の7)

調査区の北東隅にある。径約4.4mの円形周溝状遺構の一部と思われる。SK12との切りあいは明らかでない。SK12の南側は位置からSX01の一部とも考えられなくもないが、その部分にSK12と遺構番号が付けられており別遺構と考えられる。SK10は位置から円形周溝の部分的な落ちの一部と考えられなくもない。遺物の出土はなく時期は不明である。

第16図はP14.25から出土した遺物である。

P14は調査区北辺中央の小穴である。周辺に小穴が多く配列しそうなものもあるが判断できるものはなかった。1は土師器の甕で内面のヘラケズリが粗い。P25は調査区中央南側でSD01の南側にある浅い落込みである。SD01との境はない。2は陶器の皿と思われる。釉色は内面が濃い緑色、外面が白磁のようなわずかに緑みがある灰白色の色調である。内面は蛇の目釉はぎ、高台たたみつきは平滑で磨られている可能性がある。

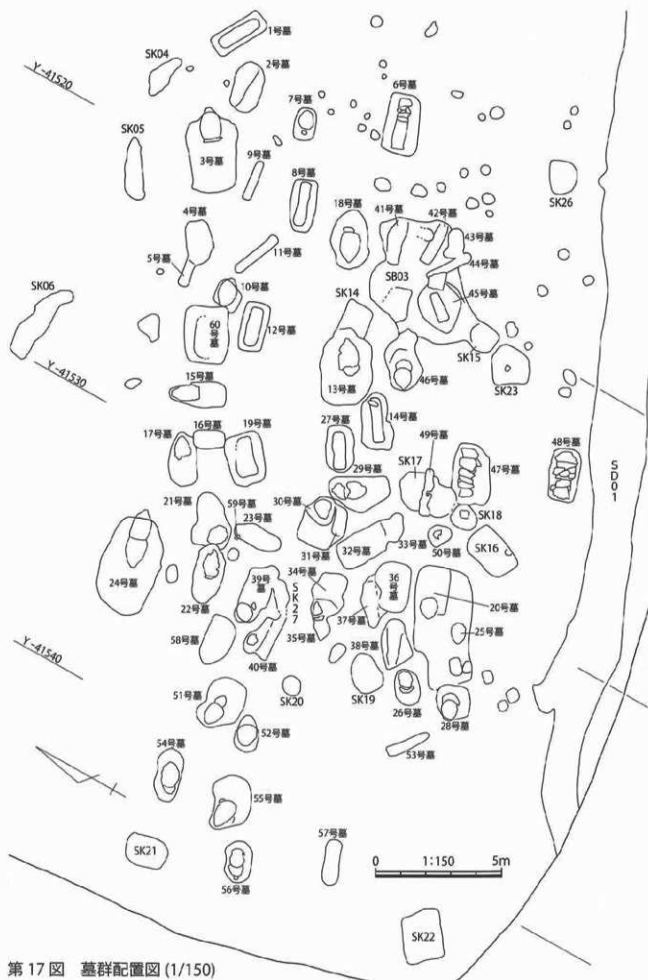


第16図 P14・25 遺物実測図(1/4)

第17図は調査区中央の南寄りから南西部の遺構配置図を拡大したものである。墓が集中して見つかっている。箱式石棺墓1基、石蓋土壇墓2基、甕棺墓28基、木棺墓・木蓋土壇墓・それらの可能性があるものを含め土壇墓30基の計61基である。以下墓壇の形状から分別し箱式石棺墓、土壇墓、甕棺墓の順に記載する。土壇墓の中には記録の上では土坑と区別ができないものがあるが調査現場での判断に基づき墓としている。土坑は15基あり、土壇墓のあとに記載する。土坑のうち土壇墓と区別できないものがある。おそらく土壇墓と判断することができなかったものと推測する。また時期が分かるものは僅少で、墓群と異なる時期の土坑が混じっていることも考えられる。

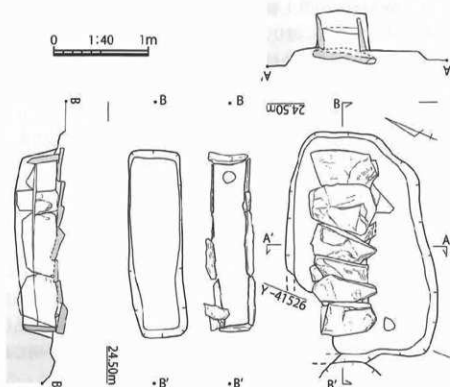
47号墓 (第18図 図版5の1, 6の1, 2)

墓群中央の南より、48号墓の北にある箱式石棺墓である。SK17に切られる。いびつな隅丸長方形の墓壇(2.4×1.6m)を掘り、北東によせて約0.4mの深さを長方形(2.0×0.6m)にもう一段掘り下げて側板、小口を設ける。その中に深さ約0.15mの土を入れ棺床を形成する。棺の内法は東小口0.34m、西小口0.24m、深さ0.25mである。東小口から0.15mはなれた中央に径0.1mの範囲で赤色顔料が分布する。こちら側が頭位となるうか。石蓋



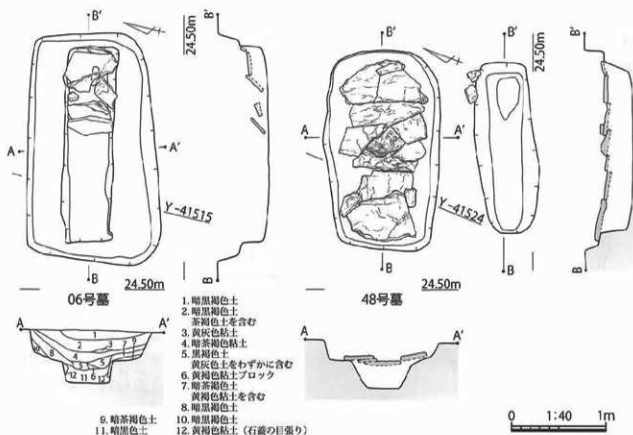
第 17 図 墓群配置図 (1/150)

は幅が0.7m前後あり東側から西側へ架けられる。棺に使われた石材は片岩である。人骨、副葬品の出土はなかった。そのほか遺物は墓墳か棺内の出土か不明であるが弥生時代後期の甕の小片、時期不詳（弥生時代中期？）の丹塗の胴部片等わずかである。出土した遺物から時期を推定することは困難である。47号墓の時期は後述するSK17に切られるため弥生時代後期を含むそれ以前である。



第18図 47号墓実測図(1/40)

06・48号墓（第19図 図版5の2・6の3・4・7・8）



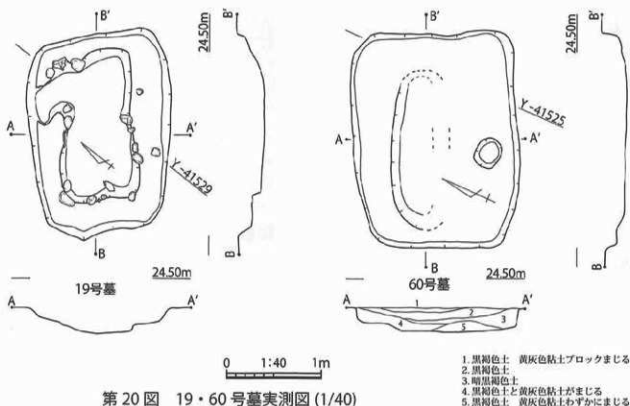
第19図 06・48号墓実測図(1/40)

06、48号墓は石蓋土墳墓である。06号墓は墓群の東端にある。やや西側が広い隅丸長方形(2.4×1.3m)に掘り、中央にさらに一段まっすぐに下げる(2.1×0.5m、深さ0.2m)。東小口から0.2mの中央付近に赤色顔料が残る。東側が頭位であろうか。赤色顔料の残りから底はほぼ整地層はなかったものと考えられる。東半に石蓋が一段下がる墓壇の中に落ち込むように出土した。石材は片岩である。落ち込んだ状況から石蓋は東から順に架けられる。断面A-A'の12は石蓋の目張り粘土が落ち込んだものである。西側は木蓋であろうか。遺物の出土はなく時期は不明である。

48号墓は墓群中央の南端にある。SD01にもっとも近い墓である。丸みが強い隅丸長方形(2.1×1.2m)に掘り、中央をさらに一段逆台形に下げる(1.8×0.6m、深さ0.3m)。東に広い範囲で赤色顔料が残る。東側が頭位であろうか。赤色顔料の残りから底はほぼ整地層はなかったものと考えられる。石蓋は幅が0.7-0.9mのものを5枚、その間を埋めるようにまたは咬ませるように小さいもので覆っている。西側から2番目のものが最初に架けられた。石材は片岩である。弥生時代中期の甕と高坏、丹塗がある壺と高坏の小片が出土している。時期を考えるには小片すぎる。石蓋の内か外かは不明である。

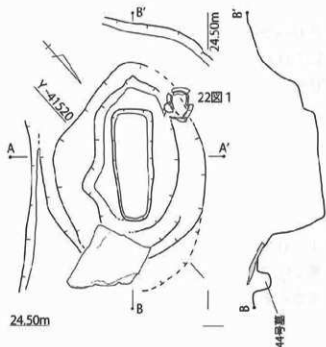
19・60号墓(第20図 図版4の3・4 6の6)

幅が広い墓壇の中に浅い長方形の段をもつ墓である。19号墓は木棺墓?で墓群中央の北より、16、17号墓の南、27号墓の北にある。隅丸長方形の墓壇(2.1m×1.5m)を掘り、その中にさらに浅く長方形(1.6×0.8m、深さ0.1m)の段が掘られる。浅い長方形の段の周りに石を図示してあるが、敷いたものではなく地山中に含まれる礫が残ったものと思われる。調査区の場所によっては検出面からすでに礫がみられ、その他の遺構においても



掘形に礫が露出している状況が多くある。段の北部の出や成形が整っていないのは礫のためではなかろうか。現場調査担当者は木棺の痕跡はないが木棺墓かと推定しており、おそらく墓壇の形状や堆積状況からと思われる。遺物は出土していない。

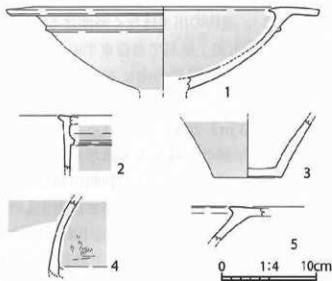
60号墓は土壌墓で墓群中央の北東、19号墓の北東、04号墓の西にある。隅丸長方形の墓壇(2.3m×1.8m)を掘り、底は北半が高くなる段差がある。断面A-A'の5はその広がりやどの段階でものか不明であるが、写真を見るとほかより大きな地山ブロックを含む。整地層であれば楕円に近い長方形の段(1.7×0.6m、深さ0.1m)となる可能性がある。墓群のなかで甕棺墓をのぞいて墓壇が幅広いものは19号墓だけである。19号墓は木棺墓?であるが60号墓は土壌墓とされている。おそらく木棺の痕跡が底面や堆積状況から判断できなかったためと思われる。遺物は出土していない。時期は10号墓を切っていることから弥生時代中期後半以降である。



45号墓. 45号墓上層 (第21図 図版4の6 遺物22図)

墓群中央の東より、13号墓の東、44号墓の西の土壌墓であるSB03に切られている。楕円形の墓壇の底に浅い長方形の段がある形状であるが、断面形状や写真から楕円形の範囲は外に広がるようであり、第22図2-5の遺物が45号墓上層として取り上げられ、1も断面A-A'より上層の遺物であることから、45号墓の上に土坑が重なっていると考えたい。45号墓の墓壇は形状が不明瞭であるが写真から1.6×0.7+mの長方形が想定される。底中央に長方形の浅い段(1.2×0.4m、深さ0.1m)が掘られる。浅い段を有する19、60号墓に比べ墓壇の幅が狭い。遺物は出土していない。

第21図 45号墓実測図(1/40)



第22図 45号墓上層遺物実測図(1/4)

45号墓上層の土坑は形状が不明であるが分かる部分では楕円形(2.4×1.7m、深さ0.4m以上)である。44号墓にまたがる礫は0.3-0.7cmの輝石を含む安山岩で掘形に沿って傾く。礫は板石で片側が直角の台形で斜辺も加工されている。付近の墓の標石であった可能性はある。第22図の弥生土器が出土している。1-4は丹塗されている。2-5は破片が小さい。1は高坏の坏部で伏せたような状態で出土した。坏の上部と下部は接合しない。口縁上面に約0.2cmの間隔で幅0.1cmの暗紋が放射状に施される。調整は内外面ともナデとしたがヘラミガキの可能性はある。2は甕の口縁部で丹塗の状態は悪い。凸帯上面は凹線状にくぼむ。3は甕の底部である。底径を大きく復元しているかもしれない。底はヘラケズリである。4は壺の頸部で胴部との境の凸帯ははがれ、胴部との胎土継目で割れている。5は鉢または高坏の口縁部である。胎土に角閃石が目立つ。

1から時期は弥生時代中期後半である。遺構の時期からSB03に切られる。遺物の取上げが単に上部としてのものか層界によるものか確認できないため45号墓との切りあいは不明としておく。

01. 08. 12. 14. 27号墓

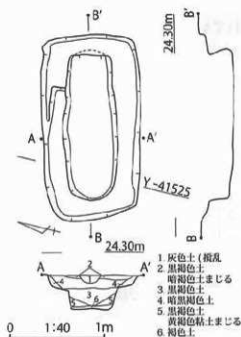
(第23. 24図 図版4の3. 5. 7. 8 7の1-5遺物 87図02)

墓壇の中央に一段さらに墓壇が掘り込まれ二段状になっており、小口方向も段となっているものである(二段Aとする)。01号墓は木蓋土壇墓で墓群の北東隅、03号墓の北東にある。長方形の墓壇(2.3×0.8m)の中央に二段目の墓壇(1.8×0.5m、深さ0.3m)が掘り込まれる。断面A-A'の不整な堆積状況から木蓋土壇墓と判断したと思われる。遺物の出土はなく時期は不明である。

08号墓は木蓋土壇墓で墓群東部の中央、18号墓の北、03号墓の南にある。隅丸長方形の墓壇(2.1×1.0m)の中央に二段目の墓壇(1.8×0.4m、深さ0.3m)が掘り込まれる。一段目の西半が台形状となっているが、非常に浅く本来の形状ではない。遺物の出土はなく時期は不明である。

12号墓は木蓋土壇墓で墓群東半の中央北より、13号墓の北、60号墓の南にある。長方形の墓壇(2.0×1.0m)の中央に二段目の墓壇(1.5×0.6m、深さ0.3m)が掘り込まれる。断面A-A'の堆積状況や層の記載から木蓋があったかどうか判断しがたいが、調査現場の判断の通りとしておく。弥生時代中期の甕の破片が2点出土しているのみである。点数が少なく時期は不明としておく。

14号墓は墓群の中央、13. 27号墓の南、47号墓の北にある。やや不整形な墓壇(2.3×1.3m)の中央に二段目の墓壇(1.8×0.5m、深さ0.2m)

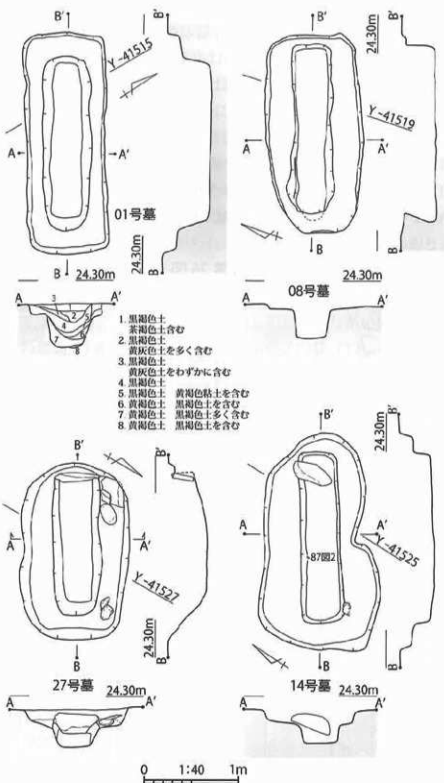


第23図 12号墓実測図(1/40)

が掘られる。東小口近くに礫が二段目の墓壇に落ち込むように出土している。位置から標石が落ち込んだとは考えがたい。二段目に架けることができる大きさから蓋の一部あるいは押えではなかろうか。土墳墓とされているが木蓋土墳墓?と考えたい。二段目墓壇の北辺中央付近底面から第 87 図 2 の磨製石鏃が出土した。軸が辺に沿うことから埋葬に伴うものと考えられる。先端、基部は折れている。側縁は細かい欠けが多い。弥生時代の遺物である。遺構の時期は幅広く弥生時代ととらえておく。

27 号墓は墓群の中央、13、14 号墓の西、19 号墓の南にある。丸みが強い隅丸長方形の墓壇 (1.9×1.1m) の中央に二段目の墓壇 (1.5×0.5m、深さ 0.2m) が掘り込まれる。西小口に板石が据

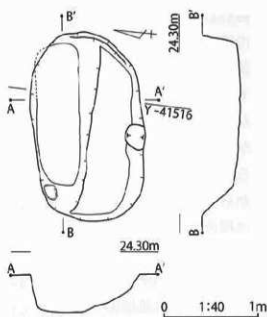
えられる。東小口は傾斜面になっており、底は舟形状で地山の礫が多く露出している。一段目の墓壇の西隅に墓壇にくいこむように礫が置かれている。また理由は不明であるが一段目の北側に底から離れた位置に数個の礫がある。土墳墓となっているが小口に石が使われていること、形状から木蓋土墳墓?としたい。遺物の出土はなく時期は不明である。



第 24 図 01・08・14・27 号墓実測図 (1/40)

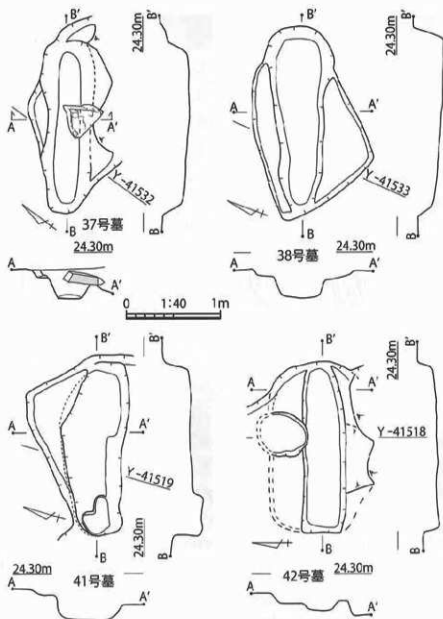
02号墓(第25図 図版7の6)

02号墓は墓群の北東隅、01号墓の西、03号墓の東にある。短辺が丸く長辺は直線的な墓壇(2.0×1.2 m)の北辺に段状(1.9×0.6 m、深さ0.1 m)に掘られる。小口側に段を設けない。北東隅はから北辺の墓壇壁はえぐれており、段は傾斜がゆるいところが多いため墓壇を掘る都合で段状になったと考えるほうがよいかもしれない。遺物の出土はなく時期は不明である。



第25図 02号墓実測図(1/40)

37・38・41・42号墓(第26図 図版7の7・8 8の8)



第26図 37・38・41・42号墓実測図(1/40)

墓壇の中央付近にさらに一段墓壇が掘り込まれ二段になっており、小口方向に段がないまたは外に出る土壇墓である(二段Bとする)。一段目の墓壇は不定形であり45、49号墓のように墓壇の上にかぶる祭祀土坑の可能性もあるだろうか。

37号墓は墓群西半の中央、32号墓の西、38号墓の北東にある。36号墓と切りあい関係は不明であるが、36号墓が37号墓を避けるような形状をしており36号墓が新しい遺構の可能性はある。南側の形状は不明である

が不定形な墓墳(2.1×0.9 m)の北東側に段状(1.8×0.6 m、深さ 0.3 m)に掘られる。中央に礫がほぼ水平に出土している。二段目に落ち込んでいないため木棺や蓋はなかった可能性がある。遺物の出土はなく時期は不明である。

38 号墓は墓群西半の中央、37 号墓の南西、26 号墓の北東にある。不定形な墓墳(2.1×1.0 - 1.2 m)の中央に段状(2.0×0.4 m、深さ 0.2 m)に掘られる。東側が広く(0.7 m)西側はとがるように丸い形状である。遺物の出土はなく時期は不明である。

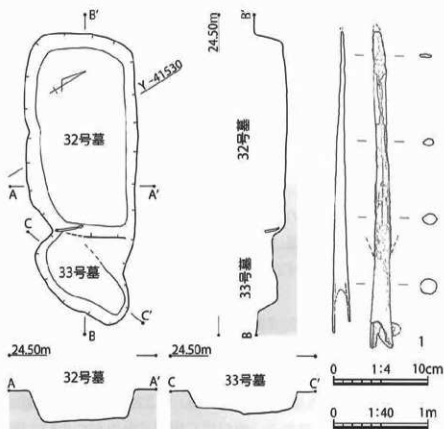
41 号墓は墓群東半の中央付近、18 号墓の南、42 号墓の北にある。南側はSB03から続く低まりのため形状が不明である。不定形な墓墳(1.9 + ×1.1 m)の中央に段状(1.8×0.5 m、深さ 0.3 m)に掘られる。二段目は北側が大きくえぐれており、北辺が直線的でなくくの字に折れるのは墓墳をうまく掘れなかったためと思われる。また南西隅にL字状の掘り込みがある。遺物の出土はなく時期は不明である。

42 号墓は墓群の東、41 号墓の南、43 号墓の北にある。北側はSB03から続く低まりのため形状が不明瞭だが写真で確認できる。南側は43 号墓と接し形状、切りあいは不明である。丸みが強い隅丸長形状の墓墳(1.8 + ×1.1 以上m)の中央に段状(1.8×0.5 m、深さ 0.1 m)に掘られる。二段目はほぼ長方形で浅い。遺物の出土はなく時期は不明である。

32 号墓(第27図 図版5の3 6の5)

土墳墓のうち隅丸長方形として形状、規模があるものは32 号墓の1基のみである。長軸が短いもの(34、36 号墓)楕円形に近いもの(23 号墓)は分類上含めるべきかもしれない。

32 号墓は墓群の中央、30 号墓の南、47 号墓の北西にある。隅丸長方形(2.1 + ×1.2 m、深さ 0.3 m)の墓墳である。33 号墓と切あうが関係は不明である。底は若干丸みがあり、第27図1が底から少し浮いた位置から出土しているため、整地層があった可能性がある。1は青銅器の鋒で南西の墓墳の壁に鋒を下に向け立てかけるように出土している。副葬されたものである。鋒は曲り、袋から開ま



第27図 32・33 号墓・遺物実測図(1/40 1/4)

で、先端から 4.5 - 10.0cm の間は表面が残っているが、その他はやせている。残存長は 33.2cm で先端は欠けているが形状から 1 cm 程度である。袋の尻の残存は判断が難しく、段差や線はない。耳の基部や図上左側の関へかかる部分は確認できる。袋の尻から関まで 9.5cm、関から脊の鎗の始まりまで 3.6cm、鎗が確認できる範囲は 11.6cm である。脊から樋にかかる部分は状態が悪いがところどころ残る。袋の中に真土が詰まる。色調は保存処理後であるが、茶色みがある灰色部分がおおく、袋部分は灰黒色の部分があり灰白色の錆が浮いている。袋の尻の破面のごく一部に緑青が確認できる。弥生時代後期のものと考えられており、遺構の時期も弥生時代後期である。

05. 09. 11. 44. 49. 53. 57号墓 (第28図 図版7の5 8の1-6)

土壌墓のうち長方形で幅が狭いものである。二段の墓壇を参考にとすると検出面からの深さが 0.3 m 以下のものは二段の上部の墓壇がなくなってしまったものか、もとの墓壇形状を表しているかの区別はできない。

05号墓は墓群の北東、60号墓の北東にある。04号墓と切りあう。切りあい関係は不明である。墓壇は長さ 1.1 m 以上、幅 0.4 m、深さ 0.2 m の大きさである。遺物の出土はなく時期は不明である。

09号墓は墓群の北東、03号墓の南西、08号墓の北にある。墓壇は長さ 1.7 m、幅 0.3 m、深さ 0.2 m の大きさである。遺物の出土はなく時期は不明である。

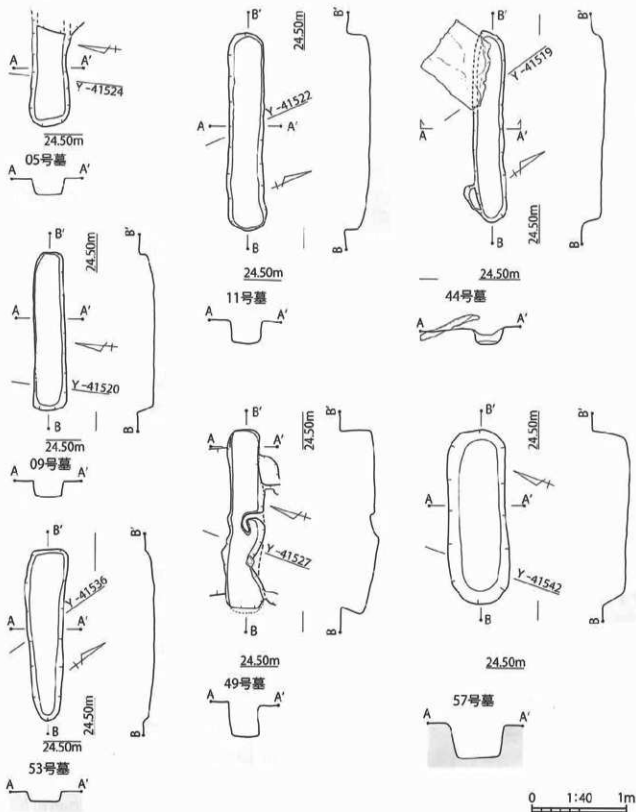
11号墓は墓群北東の中央付近、60号墓の東、18号墓の北西にある。墓壇は長さ 2.1 m、幅 0.4 m、深さ 0.2 m の大きさである。短辺は丸みがある。遺物の出土はなく時期は不明である。

44号墓は墓群東半の南、45号墓の北東、43号墓の西にある。墓壇は長さ 2.0 m、幅 0.3 m、深さ 0.2 m の大きさである。短辺は丸い。SB03 や 45号墓上層との切りあい関係は不明である。台形をした礫が墓壇にかかるが、45号墓上層のほうへずれるように傾いているため、44号墓にともなう可能性も考えられるが明らかにできない。遺物の出土はなく時期は不明である。

49号墓は墓群中央の南より、47号墓の北西、32号墓の南東にある。墓壇は長さ 1.9 m、幅 0.4 m、深さ 0.4 m の大きさである。底は船底状で、長辺南側の墓壇の成形はよくない。SK17 との切りあい関係は不明である。弥生時代後期の甕の小片が 1 点、弥生時代中期の高杯の坏部小片などわずかであるが出土している。遺物点数は少なく切りあう遺構もあり、時期は不明である。

53号墓は墓群の南西、26・28号墓の西にある。墓壇は長さ 1.8 m、幅 0.4 m、深さ 0.1 m の大きさである。深さが特に浅い。短辺南側はとがるように丸い。遺物の出土はなく時期は不明である。

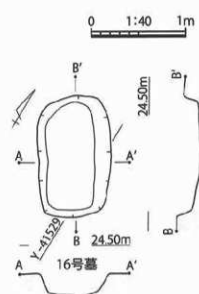
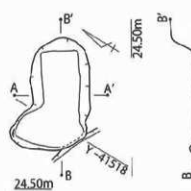
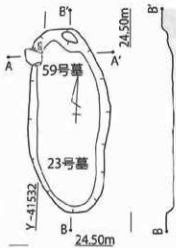
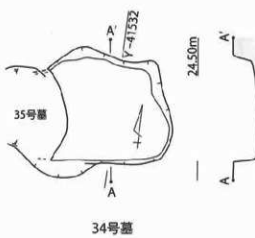
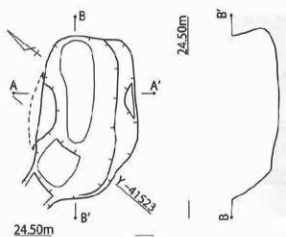
57号墓は墓群の西端、56号墓の南、SK22の北にある。墓壇は長さ 1.8 m、幅 0.6 m、深さ 0.4 m の大きさである。幅が広く短辺は丸みがつよい。遺物の出土はなく時期は不明である。



第28図 05・09・11・44・49・53・57号墓実測図 (1/40)

04. 23. 34. 36. 58号墓 (第29図 図版8の6-8 9の1 12の4)

土壌墓のうち長さに対して幅が広いものである。04号墓は墓群の北東、60号墓の北東、03号墓の南西にある。墓壇は長さ1.7m、幅1.0m、深さ0.5mの大きさである。形状は丸みが強い隅丸長方形をしている。北東、北西辺の墓壇の壁が大きくえぐれており、底に凹



第29图 04·16·23·34·36·43·58·59号墓实测图(1/40)

凸が目立つなど成形がよくない。遺物の出土はなく時期は不明である。

23号墓は墓群中央の北より、24号墓の南東、30号墓の北にある。墓壇は長さ2.0m、幅0.9m、深さ0.1mの大きさである。形状は楕円形に近い長方形である。59号墓との切りあい関係は不明である。遺物の出土はなく時期は不明である。

34号墓は墓群中央の西より、32号墓の西にある。墓壇は長さ1.3m以上、幅1.1m、深さ0.3mの大きさである。長さは1.5mを越えることはない。遺物の出土はない。35号墓に切られている。35号墓は弥生時代中期の遺構のため時期はそれ以前である。35号墓の甕棺は南半が横に開くように出土している。横を支えていた土がなくなっただけだと考えると34号墓は木棺墓の可能性も否定できない。

36号墓は墓群中央の南東より、32号墓の西にある。墓壇は長さ2.0m、幅1.1・1.5m、深さ0.4mの大きさである。37号墓との切りあい関係は不明であるが、36号墓が37号墓を避けるように北西部を狭くしていることから37号墓より新しいと思われる。遺物の出土はなく時期は不明である。

58号墓は墓群西半の北より、24号墓の南、51号墓の北東にある。墓壇は長さ2.0m、幅1.1m、深さ0.3mの大きさである。北辺は直線的であるが丸み強い形状である。遺物の出土はなく時期は不明である。

16. 31. 33. 43号墓 (第27. 29. 40図 図版10の6 11の2 7の8)

長軸が短い土壇墓である。16号墓は墓群中央の北より、19号墓の北にある。長さ1.3m、幅0.8m、深さ0.2mの大きさの長方形である。北辺は直線的であるが丸み強い形状である。17号墓との切りあい関係は不明である。遺物の出土はなく時期は不明である。

31号墓は墓群西半の中央、32号墓の東にある。30号墓との切りあい関係は不明である。長さ1.2m、幅0.6m、深さ0.4mの大きさの長方形である。遺物の出土はなく時期は不明である。

33号墓は墓群中央の北より、SK17の西にある。32号墓との切りあい関係は不明である。長さ1.2m、幅0.6m以上、深さ0.2mの大きさのややいびつな長方形となろうか。32号墓と接するあたりでふくらむような形状である。遺物の出土はなく時期は不明である。

43号墓は墓群東半の南より、42号墓と44号墓の間にある。44号墓と接している。長さ1.2m、幅0.6・0.8m、深さ0.2mの西側が広い長方形となろうか。写真では底面に若干段差が認められ、2つの遺構が重なっていると考えられることも可能である。32号墓と接する。遺物の出土はなく時期は不明である。

SK17 (第88図 図版8の3 遺物 第89図4-8)

墓群中央の南より47号墓を切る祭祀土坑である。長さ2.3m、幅1.6m、深さ0.4mの大きさで不定形な形状である。底も同様である。47号墓を切っている。49号墓との切りあい関係は不明である。南半から遺物、礫が面的に広がるように出土しており祭祀土坑と考えられる。

第 89 図 4-8 の弥生土器、石皿？が出土している。4 は壺の底部で、若干湾曲した上げ底状の底から丸みをもって立ち上がる。外面調整のナデは丁寧で、内面調整のナデは強くユビオサエ状に見えるところが多い。内面の器表は橙色に発色しており赤い焼きの可能性がある。5 は外面に丹塗の甕の小片である。壺の胴部の可能性もある。暗文は密でありヘラミガキとすべきかもしれない。6 は外面に丹塗の壺の口縁部小片である。外面に暗文がある可能性があるが摩耗のため判別できない。7 は高坏の口縁部片である。外面は摩耗著しく、内面丹塗としたが間違っている可能性がある。8 は石皿？で図上の下半はほかの面にくらべ滑らかであるが明らかに磨っているとはいえない。4 は弥生時代後期の遺物と考えられ、7 は大きな破片ではないが同様である。5 や 6 は弥生時代中期と考えられるが、墓群中の遺構では丹塗の同時代の土器片が出土することのほうが多いことから SK17 は弥生時代後期の遺構である。

SK14. 16. 19. 22. 23. 26. 27. 21号墓北東

(第 30. 76 図 図版 9 の 2-6 12 の 7)

形状が四角形から丸みが強い四角形、楕円形に近い土坑で、検出面からの深さが浅いものである。底は概ね平坦である。立地から墓の可能性は否定できない。遺構の時期が分かるものではなく、墓群と関連がないことも十分に考えられる。

SK14 は墓群東半の中央、18 号墓の西にある。13 号墓との切りあい関係は不明である。長さ 1.2 m 以上、幅 1.1 m、深さ 0.2 m の大きさで残る範囲の形状は長方形である。図示できる遺物の出土はなく時期は不明である。

SK16 は墓群中央の南端、47 号墓の南西にある。長さ 2.0 m、幅 1.3 m、深さ 0.1 m の大きさで形状は丸みがある長方形である。図示できる遺物の出土はなく時期は不明である。

SK19 は墓群西半の中央、26. 38 号墓の北西にある。長さ 1.6 m、幅 1.2 m、深さ 0.1 m の大きさで形状は北東部が丸くとがる丸みが強い四角形である。図示できる遺物の出土はなく時期は不明である。

SK22 は墓群の西端、57 号墓の南にある。長さ 2.0 m、幅 1.6 m、深さ 0.1 m の大きさで形状はわずかにゆがみがある四角形である。底にゆるい段差がある。調査区の南西端、53. 57 号墓が位置するあたりから検出面には礫が非常に多く混じる。図示できる遺物の出土はなく時期は不明である。

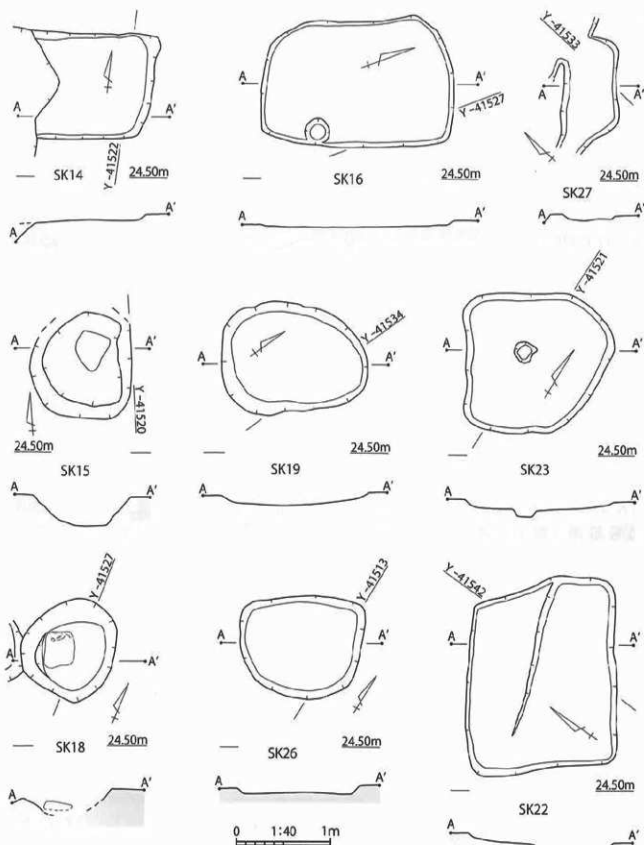
SK23 は墓群東半の南端、47 号墓の東にある。長さ 1.6 m、幅 1.5 m、深さ 0.2 m の大きさで、形状は四角形の一辺がくの字に張り出した五角形である。図示できる遺物の出土はなく時期は不明である。

SK26 は墓群東端、06 号墓の南、SD01 の北にある。長さ 1.3 m、幅 1.1 m、深さ 0.1 m の大きさで形状は丸みが強い四角形である。新たに遺構番号を付した。図示できる遺物の出土はなく時期は不明である。

SK27 は墓群西半の中央北より、35 号墓の北、40 号墓の東にある。長さ 1.1 m、幅 0.6 m、深さ 0.1 m の大きさで形状は四角形である。底はゆるくたわむ。新たに遺構番号を付した。

39号墓との切りあい関係は不明である。40号墓南と溝状の落ち込みでつながっているが、その成因は分からない。図示できる遺物の出土はなく時期は不明である。

21号墓北東は墓群中央の北より、24号墓の南東、19号墓の西にある。長さ2.1m、



第30図 SK14・15・16・18・19・22・23・26・27 実測図 (1/40)

幅 1.2 - 1.5 m、深さ 0.1 m の大きさで、形状は楕円形状で北西部がふくらむ。丸みをもって底となる。22 号墓に切られている。また 21 号墓の甕棺の出土状況から推定して切られている。新たに遺構番号を付けていないが 21 号墓と別の遺構ととらえた。図示できる遺物の出土はなく時期は不明である。

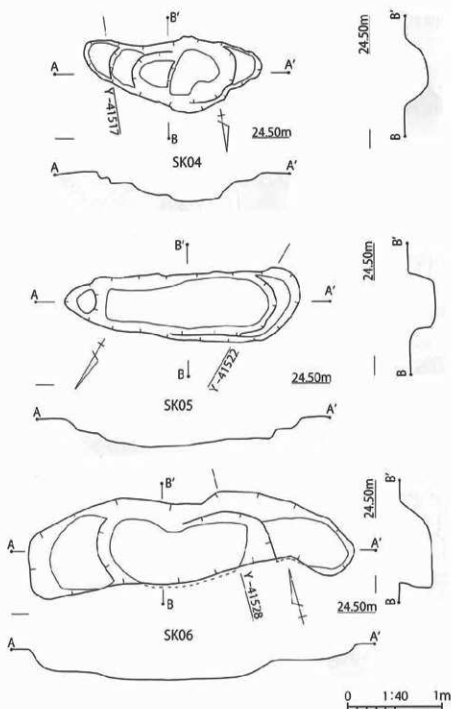
SK15. 18 (第30図 図版9の3 13の3)

形状が円形に近く、上記に比べ深い土坑である。SK15 は墓群東半の南、45 号墓の南にある。長さ 1.1 m、幅 1.1 m、深さ 0.3 m の大きさである。45 号墓上層との切りあい関係は不明である。図示できる遺物の出土はなく時期は不明である。

SK18 は墓群中央の南、47 号墓の西、SK16 の北にある。長さ 1.0 m、幅 1.0 m、深さ 0.2 m の大きさである。角が丸く四角く平たい礫が底付近から出土している。図示できる遺物はなく時期は不明である。

SK04. 05. 06. 40 号墓南 (第31. 58 図 図版9の7. 8 10の1)

長軸が長く中央付近は直線的で短辺方向は丸い形状のものである。短辺からゆるく段差をもって中央に落ち込み、底は若干丸みを持つ。SK04 は墓群の北東隅、03 号墓の北にある。長さ 1.9 m、幅 0.8 m、深さ 0.3 m の大きさである。図示できる



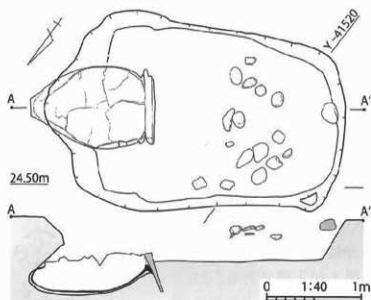
第31図 SK04・05・06 実測図 (1/40)

遺物の出土はなく時期は不明である。

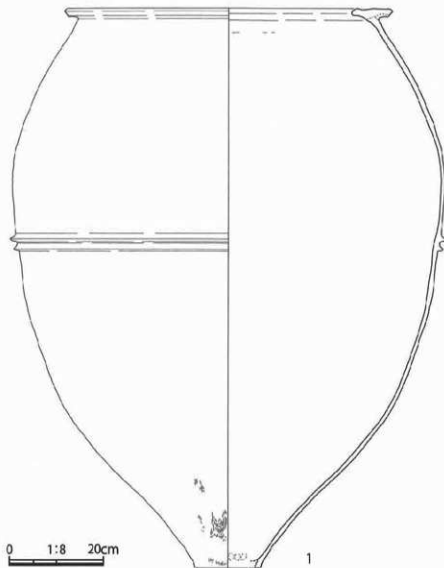
SK05は墓群の北東隅、03号墓の北東にある。長さ2.5m、幅0.7m、深さ0.3mの大きさである。03号墓との配置から土壌墓、または関連する遺構の可能性もあるかもしれない。図示できる遺物の出土はなく時期は不明である。

SK06は墓群の北、60号墓の北東にある。長さ3.5m、幅0.9m、深さ0.4mの大きさである。北側の壁が大きくえぐれている。図示できる遺物の出土はなく時期は不明である。

40号墓南は墓群西半の北より、58号墓の南、51号墓の東にある。長さ1.6m、幅0.5m程度、深さ0.1mの大きさである。40号墓の墓壇としては不自然なため別の遺構とした。SK27と溝状の落ち込みでつながっているが、その成因は分からない。また溝状の落ち込みは40号墓南の底にもつづく。図示できる遺物の出土はなく時期は不明である。



第32図 03号墓実測図(1/40)



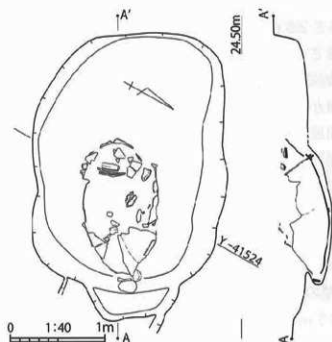
第33図 03号墓甕棺実測図(1/8)

03. 13. 24号墓 (第32-37図 図版10の3-4 遺物 第87図1)

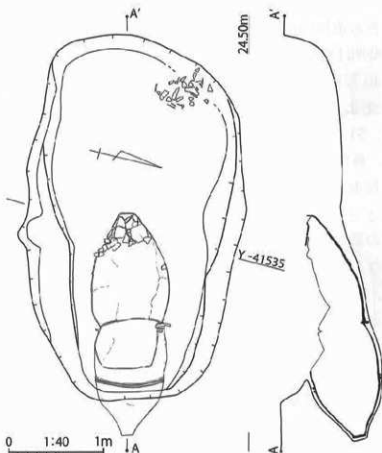
墓壇が長大な甕棺墓である。03号墓 (第32図) は墓群の北東、60号墓の北東にある。形状が隅丸長方形で長さ3.2m、幅1.7-2.1m、深さ0.5mの大きさの墓壇の北東側に深さ0.4mの甕棺を入れる墓壇を掘る。棺はひしゃげて出土しているもののゆるい角度で据えられたと推定する。蓋は板石が用いられる。墓壇埋土中に礫が多数入るが、標石が落ち込んだものかどうかは不明である。

第33図1が下甕である。口縁はT字形で内側への出がやや長い。内側端部はヨコナデが強く丸いくちばし状である。外側はゆるい凹面をなし上部が厚い。口縁部の胎土の接合線は明瞭である。丸みを帯びた器形で全体として縦長な球形である。胴の上部に最大径をもち凸帯付近は丸まりがゆるく胴下部でやや強くすぼまり底部となる。2条の凸帯が間隔2.3cmで廻る。外面調整は底部付近にハケメがのこりハケメのあとナデである。内面はナデである。弥生時代中期後半の前葉と考えられる。第87図1は石庖丁である。色調は青み、緑みのある灰色で白みがある細かい筋がはいる。片岩である。器表の残りが悪い。棺の内、外出土のものか不明である。残存状態が悪く副葬されたものとは考えがたい。

13号墓 (第34図) は墓群東半の中央、60号墓の南、18号墓の南西にある。SK14との切りあい関係は不明である。形状は



第34図 13号墓実測図 (1/40)



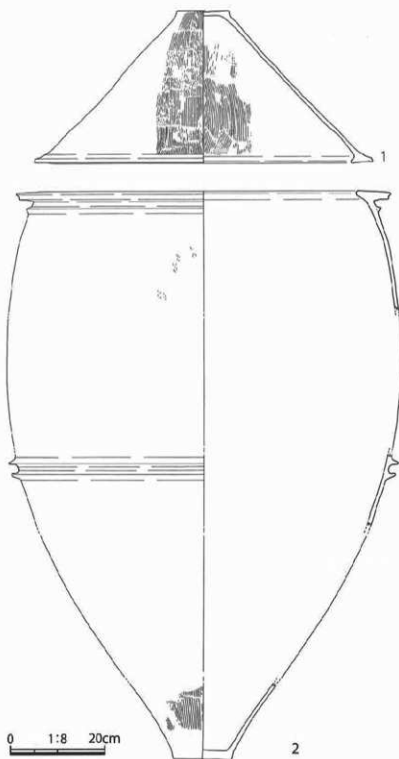
第35図 24号墓実測図 (1/40)

丸みが強い隅丸長方形で長さ 3.0 m、幅 2.0 m、深さ 0.4 m の大きさの墓壇の北東半に深さ 0.3 m の甕棺を入れる墓壇を掘る。棺はゆるい角度で据えられる。

第 36 図 1 は下甕の蓋である。内面端部は四角形で角があり面をなす。外側端部はわずかに凹面で上側がはねあげられたような形状である。口縁と胴の接合部分は丁寧でなく形に差がある。口縁下から直線的に底となり、全体的に三角形をなす。外面調整はハケメ、内面はハケメで底部付近のみナデである。器壁が 0.6 - 0.8 cm と非常に薄いことは下甕と同様である。2 は下甕である。破片が小さく全体の復元をすることができず出土状況を参考に復元した。口縁は L 字形に近く外側が長い。内面端部は丸みが小さくなっている。外側端部は凹面上側張り出しが強い。口縁つけ根は強く屈曲し三角形の凸帯が 1 条廻る。胴中央付近に 2 条の三角形の凸帯が 2.3 cm の間隔で廻る。外面調整は胴の上部がハケメ後ナデで底部付近はハケメ、底から約 6 cm はナデである。内面はナデである。器壁が 0.6 - 0.8 cm と非常に薄い。弥生時代中期後半の中葉と考えられる。

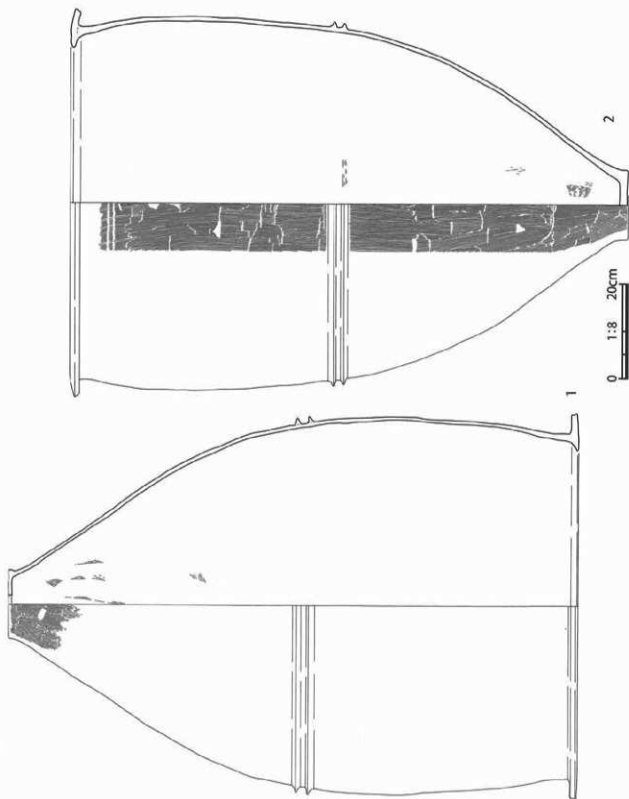
24 号墓（第 35 図）は墓群西半の北、22 号墓の北にある。形状は丸い長方形で長さ 3.8 m、幅 2.3 m、深さ 0.6 m の大きさの墓壇の北東半に深さ 0.4 m の甕棺を入れる墓壇を掘る。棺はゆるい角度で据えられる。棺が下甕と上甕で構成されることもあってか墓壇の長さが最も大きい。東側に土器片が図化されているが所在が分からなかった。

第 37 図 1 は上甕である。口



第 36 図 13 号墓甕棺実測図 (1/8)

縁は内側への出が短く外側へ長くL字形である。内側端部はとがり、外側は傾斜のあるゆるい凹面である。全体として砲弾形をなし、口縁下よりわずかにふくらむも直線的な胴部で、胴中央部からすばまり底部となる。胴中央に三角形をした2条の凸帯が間隔2.5 cmで廻る。調整はハケメのあと工具によるナデである。外面は底部付近にハケメが残り、内面



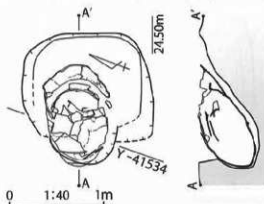
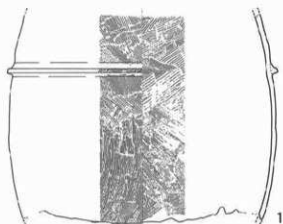
第 37 図 24 号墓甕棺実測図 (1/8)

は胴下部にハケメのあとが残る。2は下甕である。口縁はT字形で内側への出が短く外側へ長くL字形に近い。内側端部は丸みがあるもののがり気味である。外側は傾斜のあるゆるい凹面である。全体として砲弾形で、口縁下よりわずかにふくらみゆるくまるみをもちながらすばり胴下部は直線的に底部となる。胴の高い位置に最大径がくる。胴中央に三角形をした2条の凸帯が2.3 cmの間隔で廻る。外面調整は目が細かいハケメ、内面は胴下半にハケメのあとが残りハケメ後工具によるナデである。胴下半のハケメは目が太く間隔が広い。ともに弥生時代中期後半の前葉から中葉と考えられる。

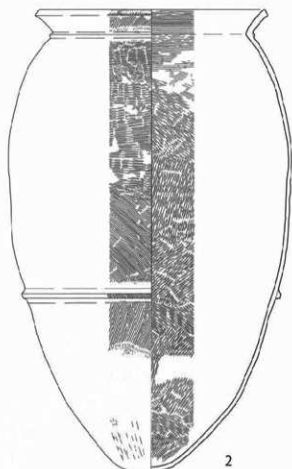
28. 30. 51. 55号墓 (第38-45
図 図版10の5-8)

墓壇が方形の甕棺墓である。28号墓(第38図)は墓群西半の南端中央、26号墓の南、25号墓の南西にある。形状は隅丸方形である。長さとは幅は変わらず1.4 m、深さ0.1 mの大きさの墓壇から西辺北よりをさらに深さ0.6 mの甕棺を入れる墓壇を掘る。棺は急な角度で据えられる。

第39図1は上甕である。口縁下より上を打ち欠いている。その時の目安線と考えられる焼成後沈線がわずかに残る。胴部はゆるくふくらみゆるくすばまる。胴下半から底部は残存していない。1条のキザミがあるコ字形の凸帯が廻る。キザミはタタキの工具ではないかと思われる。外面調整は胴中央部にところどころタタキが残りタタキ後ハケメである。内面はハケメで目の間隔が広いものと普通程度度のものが交互にまじる。2は下甕である。



第38図 28号墓実測図(1/40)

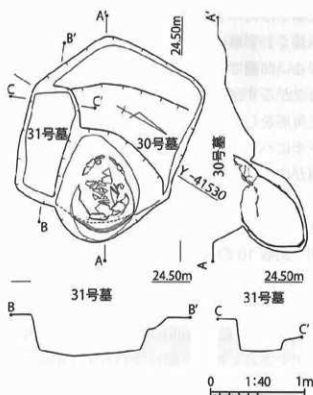


第39図 28号墓甕棺実測図(1/8)

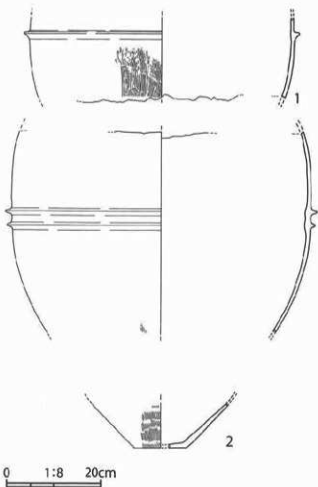
口縁はくの字となり短く直線的に開く。端部はやや凹面でキザミが施されるが中ほどはほぼ工具が当たっていない。口縁下より丸みをもって広がり胴の上位から緩やかに湾曲しながらすばまり、底部付近からやや強く曲り丸底の底部となる。底はごくわずかに立ち上がりの屈折が分かるが丸底といえる。2条の凸帯が廻り、口縁と胴部の境の凸帯は小さい三角形で胴のものは四角い凸帯の上にキザミが施される。口縁と凸帯のキザミはタタキと同じ工具の可能性がある。内面調整はハケメでくの字の屈曲部から約10 cm下は目が太い。外面は胴の上位にタタキが残りタタキ後ハケメである。胴下位から底部はさらにナデられる。2は古墳時代前期初頭と考えられる。

30号墓(第40図)は墓群西半の中央、32号墓の北、19号墓の南にある。31号墓との切りあい関係は不明である。切られてはいるが形状は南辺が張り出す台形が想定される。長さ1.9 m、幅1.3 - 1.7 m、深さ0.3 mの大きさの墓壇から東辺中央をさらに深さ0.7 mの甕棺を入れる墓壇を掘る。棺は急な角度で据えられる。墓壇と甕棺の向きが異なる。

第41図1は上甕である。口縁は打ち欠きにより胴下半以下は残存していない。1条のコ字形の凸帯が胴最大径付近に廻る。外面調整は胴下部がハケメで凸帯より2 - 6 cmはハケメが及んでいない。内面はナデである。細かい剝離が多い。胎土に片岩や角閃石が見当たらずやや違和感がある砂礫構成である。2は下甕である。口縁は打ち欠きにより残存していない。2条の凸帯が3 cm間隔で胴最大径付近に廻る。凸帯より上の胴は丸い形状で



第40図 30・31号墓実測図(1/40)

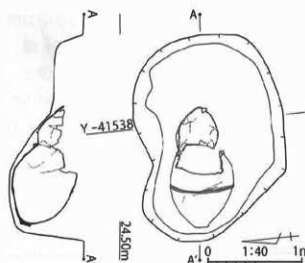
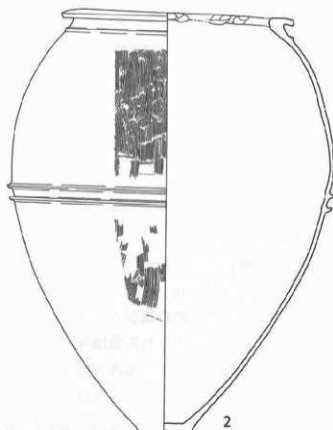
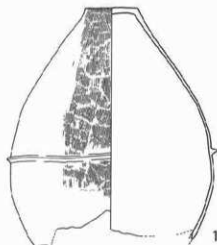


第41図 30号墓甕棺実測図(1/8)

ある。外面調整は胴下部がナデ、底部にかけてハケメである。内面はナデで細かい剥離が多い。胎土に片岩や角閃石が見当たらずやや違和感がある砂礫構成である。ともに時期は弥生時代中期と考えられる。

51号墓（第42図）は墓群西半の北中央、58号墓の西、54号墓の東にある。形状は丸みが強い長方形で、長さ推定1.8m、幅1.5m、深さ0.3mの大きさの墓壇からさらに深さ0.5mの甕棺を入れる墓壇を北西隅に掘る。棺はゆるい角度で据えられる。墓壇と甕棺の向きが異なる。

第43図1は上甕である。口縁は打ち欠きにより残存していない。胴は丸みを帯びた器形で、最大径から下がったところに1条の三角形の凸帯が廻る。外面調整は上部が不明であるが他はハケメ、内面はナデである。2は下甕である。口縁は内面端部を打ち欠いている。外側へ出は短く端部は凹面である。胴は丸みを帯びた器形で5分の2程度のところに最大径がある。最大径から下がったところに2条の凸帯が2.8cmの間隔で廻る。コ字形であるが上側を強くナデられる。口縁下には1条の三角形の凸帯が廻る。外面調整は上部がハケメで凸帯より下付近から工具によるナデが加わる。内面は工具によるナデである。2は弥生時代中期後半の前葉と考えられる。



第42図 51号墓実測図(1/40)

第43図 51号墓甕棺実測図(1/8)

55号墓(第44図)は墓群西半の西、54号墓の南、56号墓の西にある。形状は丸みが強い長方形で、長さ2.0m、幅1.5m、深さ0.4mの大きさの墓壇からさらに深さ0.4mの甕棺を入れる墓壇を西隅に掘る。棺はゆるい角度で据えられる。墓壇と甕棺の向きが異なる。出土状況から上甕はなく、有機質の蓋がなされていたのであろうか。

第45図1は下甕である。口縁は外側への張り出しが長く、内面端部は丸く外側端部は凹面である。胴の上半はゆるく丸みがあり下部から底部にかけて砲弾状にすばまる。2条の凸帯は高く、3cmの間隔がある。外面調整はハケメで内面はナデの痕跡が顕著に残る。弥生時代中期後半の前葉から中葉と考えられる。

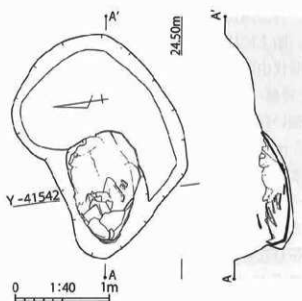
15. 17. 20. 22. 29.

39. 40. 46号墓

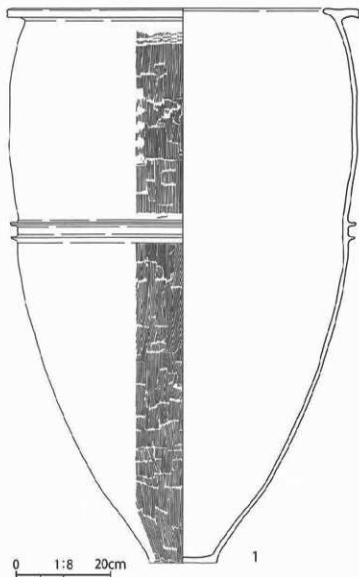
(第46-61図 図版11の1-8
遺物 第87図3)

墓壇の長さに対して幅が狭い甕棺墓である。15号墓(第46図)は墓群中央の北、60号墓の西、17号墓の東にある。形状は丸みがある長方形である。甕棺の上の墓壇掘形は不明である。長さ2.2m、幅1.0m、深さ0.1mの大きさの墓壇からさらに深さ0.2mの甕棺を入れる墓壇を北西辺に掘る。甕棺を入れる部分の深さが比較的浅い。棺はゆるい角度で据えられる。

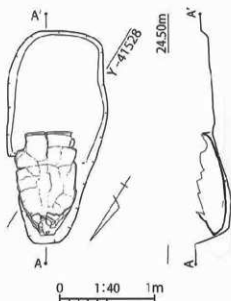
第47図1は下甕である。口縁はT字形で若干外側が長い。内面端部



第44図 55号墓実測図(1/40)

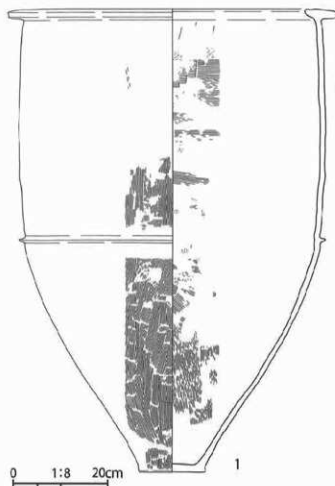


第45図 55号墓甕棺実測図(1/8)



第46図 15号墓実測図(1/40)

は丸く外側端部は凹面である。胴の上半は直線的でごくわずかに丸みがあり下部から丸まり底部にかけて直線的にすばまる。1条の三角形の凸帯が廻る。外面調整は胴の上部はナデで胴中位から下はハケメである。内面はハケメ後ナデである。ハケメがよく残る部分、ナデが施されていない部分もある。ハケメの目は細かい。赤みが強い色調である。弥生時代中期後半の前葉と考えられる。

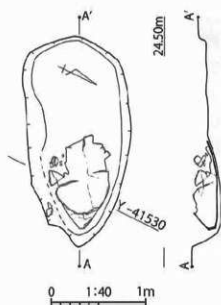


第47図 15号墓甕棺実測図(1/8)

17号墓(第47図)は墓群中央の北、24号墓の東、15号墓の西にある。形状は短辺に丸みがある長方形である。長さ2.2m、幅1.1m、深さ0.1mの大きさの墓壇からさらに深さ0.2mの甕棺を入れる墓壇を北西辺に掘る。甕棺を入れる部分の深さが比較的浅い。棺はゆるい角度で水平に近く据えられる。

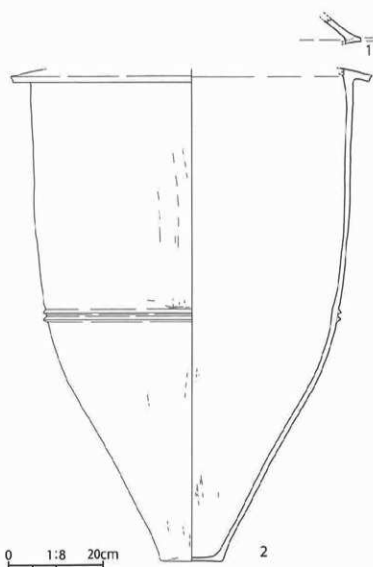
第49図1は下甕の蓋である。10cm程度の口縁部の破片であるが下甕に落ち込んだものと思われる。口縁部内面側は欠損している。外側端部は凹面で張り出しが少ない。口縁部の接合は明瞭である。口径は59cm程度であるが誤差が大きい。2は下甕である。口縁は内面側が欠損しているものの大きく内側へ張り出さないとと思われる。外側端部は深めの凹面である。口縁と胴部は接合しない。口縁下より胴部凸帯までは直線的で底部へのすばまりは比較的強い。三角形で比較的小さい凸帯が1.5cmの間隔で2条廻る。外面調整はところどころハケメの痕跡が残りハケメ後ナデである。内面は不明のところがあるが底部にハケメの痕跡が残り外面と同様と考えられる。赤みがある焼きのことが多い。弥生時代中期後半の前葉と考えられる。

20号墓(第50図)は墓群西半の南中央より、36号墓の南、SK16の西にある。形状



第48図 17号墓実測図(1/40)

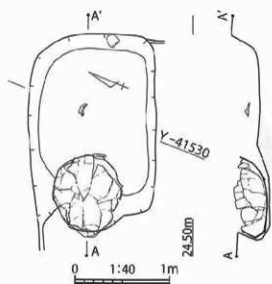
は隅丸長方形である。長さ2.1m、幅1.4m、深さ0.3mの大きさの墓域からさらに深さ0.1mの甕棺を入れる墓域を南西辺に掘る。甕棺を入れる部分の深さが比較的浅い。棺はゆるい角度で据えられる。28号墓までの間に張り出しがある長方形の落ち込みがあるが、非常に浅いもので遺構にともなうものかは分からない。



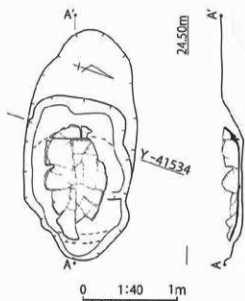
第49図 17号墓甕棺実測図(1/8)

第51図1は上甕である。胴の上部から口縁部を打ち欠いている。丸みを帯びた器形と思われる。器壁は薄く0.5-0.6cmである。胴最大径から下がったところにコ字形の凸帯が1条廻る。外面調整はハケメ、内面はハケメ後ナデである。2は下甕である。口縁内面側端部を打ち欠いている。外側端部は凹面で口縁上面にゆるい段をもつ。丸みを帯びた器形で胴の上半は丸みが強く底部にかけて直線的にすぼまり楕円形をしている。胴の下部は接合しないがそれほど誤差はないと思われる。器壁は薄く0.5-0.7cmである。口縁下に小さい凸帯を1条と胴の最大径のところに間隔が2.7cmの2条の凸帯が廻る。調整は全体的に摩耗しているが外面はハケメ、内面はナデである。外面の底をナデる。弥生時代中期後半の前葉から中葉と考えられる。第87図3の弥生土器の甕が墓域中央の底から浮いた位置に出土している。墓域を埋め戻した時に入ったものと思われる。

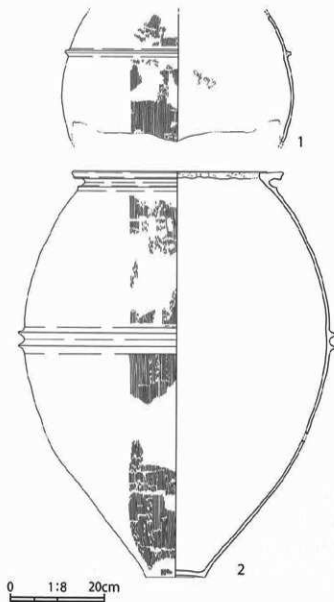
22号墓(第52図)は墓群西半の北より、24号墓の南、58号墓の東にある。浅く全体が不明も、縦長の長方形になると思われる。長さ2.4m、幅1.2m、深さが浅い大きさの墓域からさらに深さ0.2mの甕棺を入れる墓域を東半に掘る。棺は水平に据えられる。



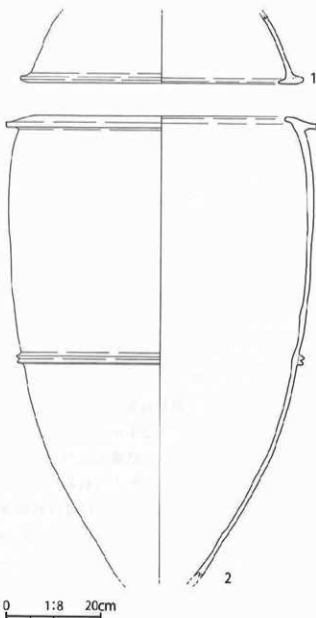
第 50 图 20 号墓基实测图 (1/40)



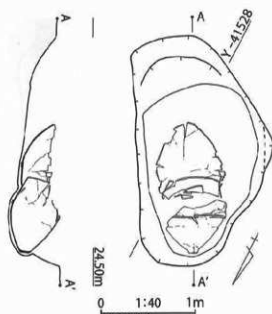
第 52 图 22 号墓基实测图 (1/40)



第 51 图 20 号墓甕棺实测图 (1/8)



第 53 图 22 号墓甕棺实测图 (1/8)

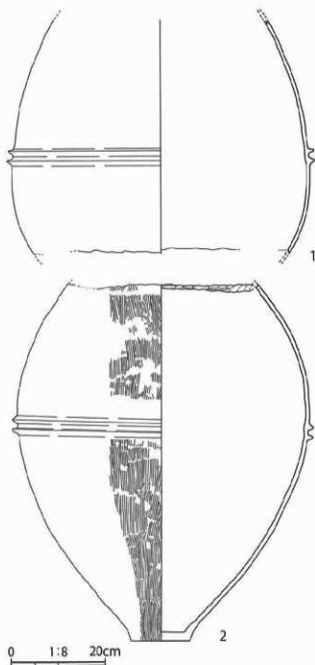


第54図 29号墓実測図(1/40)

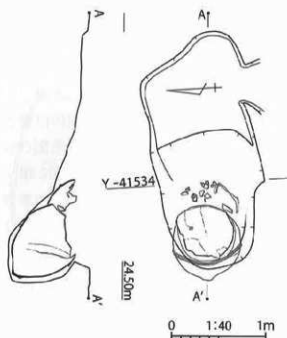
第53図1は下甕の蓋である。口縁はT字形で内側へ長く出るが尖り、外側に比べ厚みが薄い。外側端部はゆるい凹面となっている。口縁下のナデは凹凸が目立つがほかは丁寧にナデられる。2は下甕である。口縁はT字形でやや外側に長い。内面端部は丸く外側端部は凹面である。胴は全体的にゆるく丸みがあり底部にかけてすぼまる。底は残存していない。2条の三角形の凸帯は接している。内外面共に工具によるナデとしたが内面はハケメに見えところもある。弥生時代中期後半の前葉と考えられる。

29号墓(第54図)は墓群の中央、32号墓の東、47号墓の北にある。丸みがある縦長な長方形である。長さ2.4m、幅推定1.4m、深さが0.2mの大きさの墓壇からさらに深さ0.4mの甕棺を入れる墓壇を北西辺に向けて墓壇の底全面にわたり掘ったような形状である。棺はゆるい角度で据えられる。

第55図1は上甕である。口縁は打ち欠きされている。底部は残存していない。2条の三角形の凸帯がほぼ接して胴最大径付近に廻る。丸みを帯びた器形である。内外面ともに調整はナデである。2は下甕である。口縁下より上部を打ち欠いている。胴は楕円形にゆがみ最大径で59.5—67.4cmの幅がある。胴部最大径よりやや下がったところに2条の三角形の凸帯が幅2.2cmの間隔で廻る。外面調整は目が細かいハケメ、内面は工具によるナ



第55図 29号墓甕棺実測図(1/8)

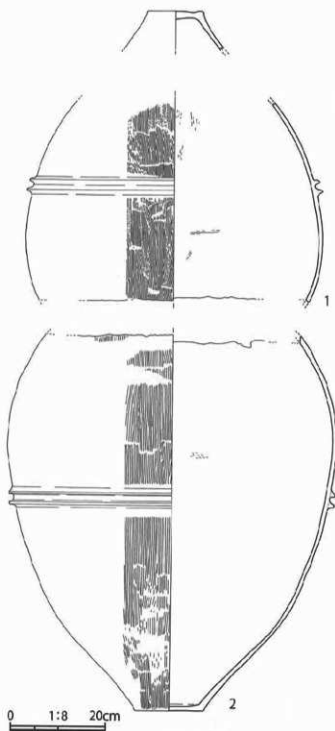


第56図 39号墓実測図(1/40)

デである。弥生時代中期と考えられる。

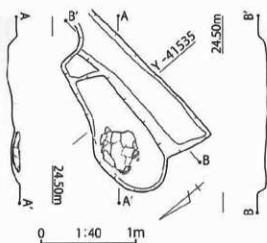
39号墓(第56図)は墓群西半の北より、58号墓の東、34号墓の北西にある。若干一隅が丸く張り出す長方形で、長さ2.3m、幅1.1m、深さが0.1mの大きさの墓壇からさらに深さ0.8mの甕棺を入れる墓壇を東半に掘る。棺は急な角度で据えられる。墓壇と甕棺の向きが異なる。

57図1は上甕である。口縁下から上部を打ち欠いている。胴が丸い器形である。底部は離れているが、棺内に落ち込んだと思われ、胎土や色調も変わらないことから同一個体である。胴最大径から下がった位置に2条の三角

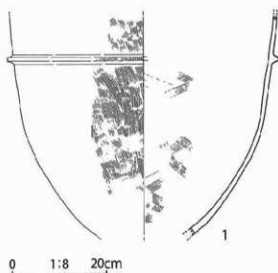


第57図 39号墓甕棺実測図(1/8)

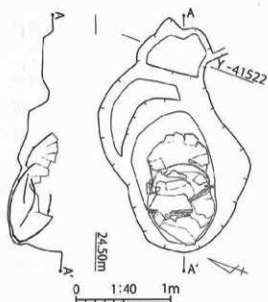
形の凸帯が2.2cmの間隔で廻る。外面調整はハケメで凸帯にも残る部分がある。底部付近はナデられる。内面はハケメがところどころ残りハケメのあと工具によるナデである。2は下甕である。口縁下より上部を打ち欠いている。丸い器形である。最大径より下がったところに2条のはっきりとしたコ字形の凸帯が2.3cmの間隔で廻る。外面調整はハケメ、内面は上部が工具によるナデ、胴中央から下部はナデである。わずかにハケメが残っている。1と2ともに口縁部がなく、弥生時代中期後半の丸みを帯びた器形と区別が難しい



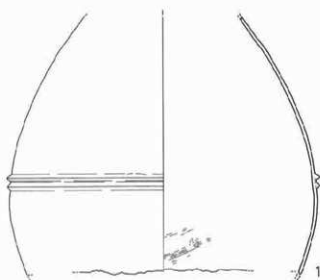
第58図 40号墓実測図(1/40)



第59図 40号墓甕棺実測図(1/8)



第60図 46号墓実測図(1/40)



第61図 46号墓甕棺実測図(1/8)

が、大きさや胴幅に対して頸部が広くなりそうな形状、底径から弥生時代後期前半と考えられようか。

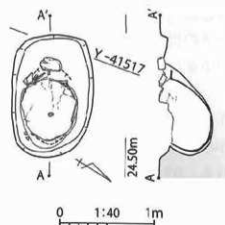
40号墓(第58図)は墓群西半の中央北より、58. 39号墓の南にある。南西部は40号墓南があり形状は不明であるが、残存する部分は縦長

な形状である。長さ 1.7 m、幅 0.6 m 以上、深さが 0.1 m の大きさの墓壇からさらに深さ 0.1 m の甕棺を入れる墓壇を西半に掘る。棺は水平に据えられる。墓壇と甕棺の向きが異なる。甕棺を入れる部分の深さが非常に浅い。

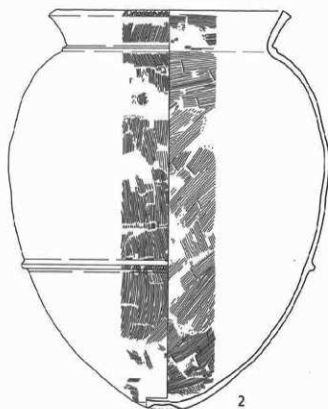
第 59 図 1 は下甕である。胴の上部、底部は欠損している。胴の上部からゆるく底部に近づくくと丸くすばまる。コ字形の凸帯が 1 条廻り凸帯上面に幅が広く浅いキザミが施されている。外面調整はハケメ、底部近くはナデられる。内面はあれているがハケメである。胎土に砂を多く含む。弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭の遺物である。

46 号墓（第 60 図）は墓群中央の東より、13 号墓の南、45 号墓の西にある。北東部に張り出す丸い長方形となると考えられる。長さ 1.8 m、幅 1.2 m、深さが 0.1 m の大きさの墓壇からさらに深さ 0.6 m の甕棺を入れる墓壇を南西に掘る。棺はゆるい角度に据えられる。墓壇と甕棺の向きが異なる。

第 61 図 1 は上甕である。口縁下から上部を打ち欠いている。丸みがつよい器形である。2 条の三角形の凸帯が 1.8 cm の間隔で廻る。器壁は薄く 0.5-0.7 cm である。外面調整はナデ、内面は一部に目が太いハケメが残っておりハケメ後ナデである。2 は下甕である。口縁下から上部を打ち欠いている。胴の上部は丸みが強く中位からゆるくすばまり底部となる。2 条の三角形をした凸帯は比較的上部にあり、間隔は 2.2 cm である。器壁は薄く上部で 1 cm 程度中位から下は 0.6-0.7 cm である。外面調整は摩耗のため不明なところが多い。凸帯より下はハケメ後ナデ



第 62 図 07 号墓実測図 (1/40)



第 63 図 07 号墓甕棺実測図 (1/8)

で底部付近はハケメである。凸帯より上はハケメが散見されナデは加わらない可能性がある。ハケメの目が細かい。内面も同様に器面の状態がよくないがナデである。弥生時代中期後半の中葉から後葉と考えられる。

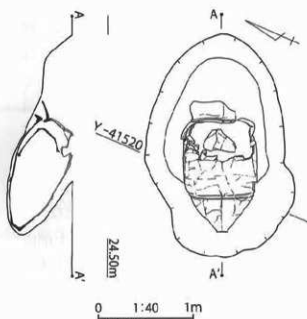
07. 18. 26. 35. 54. 56号墓 (第62-73図 図版12の1-6)

墓壇が小さい甕棺墓である。墓壇の全体形状が分かる程度に残っていないことも十分に考えられる。07号墓(第62図)は墓群の東端、03号墓の南東、06号墓の北にある。形状は丸い長方形である。長さ1.3m、幅0.9m、深さが0.0mの大きさの墓壇からさらに深さ0.5mの甕棺を入れる墓壇を北東に掘る。棺は急な角度に据えられる。上甕を支えるような位置から礎が出土している。

第63図1は上甕である。口縁下から上部を打ち欠いている。卵形の器形である。底はレンズ状にふくらみ屈曲は明瞭である。キザミが施されたコ字形の凸帯が胴最大径より下がったところに1条廻る。外面調整はハケメで胴の下半はナデ、内面は全てハケメである。2は下甕である。直線的に開く口縁をもち端部は×字にキザミが施される。キザミは左から傾きを変えながら順に施される。卵形の器形である。底は完全に丸底となっているがごくわずかに境が分かる。底にどの程度意図したものか分からないが内面まで達さない打ち欠きがある。頸部1条と胴下部にキザミが施されたコ字形の凸帯が廻る。調整は内外面ともにハケメである。2から古墳時代前期初頭と考えられる。

18号墓(第64図)は墓群東半の中央、13号墓の北東、08号墓の南にある。形状はおおむね楕円形と考えられる。長さ1.6m、幅1.5m、深さが0.4mの大きさの墓壇からさらに深さ0.4mの甕棺を入れる墓壇を南西半に掘る。棺はゆるい角度に据えられる。

第18図1は下甕の蓋である。口縁は内側端部がとがり出は短く、外側は厚み丸みがある。口縁下より直線的にすばまり底部となる。底は高台状になっている。凹凸が強く整形はやや丁寧さが欠ける。内外面とも調整はハケメの痕跡がわずかに残りハケメのちナデである。2は下甕である。ほぼ完形に残存している。口縁は内外の出が短く内側端部はとがり三角形に近い。外側は凹面になるが浅く丸みがありにぶい印象を受ける。口縁下からゆるく膨らみ胴中位からゆるくすばまり底部となり全体的に丸みがある。器壁は1cmをこえおおむね1.2-1.3cmの厚さである。胴の中央やや下に2条の三角形の凸帯が2.4cmの間隔で廻る。比較的小さい。外面調整はナデ、内面調整は工具によるナデである。弥生時代中期後半の中葉と考えられる。



第64図 18号墓実測図(1/40)

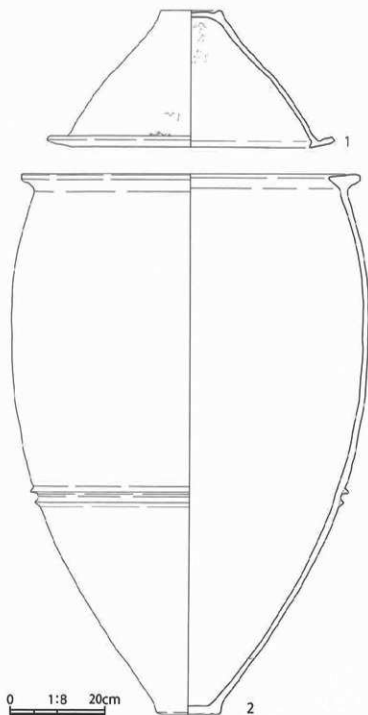
26号墓(第66図)は墓群西半の中央南より、28号墓の北、53号墓の東にある。形状はおおむね楕円形と考えられる。長さ1.5m、幅1.0m、深さが0.1mの大きさの墓壇からさらに深さ0.3mの甕棺を入れる墓壇を北東半に掘る。棺は急な角度に据えられる。

第67図1は上甕である。口縁下から上部は残存していない。打ち欠いている可能性があるが破面からは判断できない。胴は丸みがあり壺とすべきかもしれない。底はほぼ平坦で角に丸みがある程度である。胴最大径からやや下がった位置に2条の台形の凸帯が2.3cmの間隔で廻る。貼り付けの整形は丁寧でない。器壁は厚く1cmを超える。口縁端部と凸帯にはキザミが施される。内外面とも調整は工具によるナデで底はナデである。凸帯から下にタタキの痕跡が残る。タタキの目の間隔が1.0-1.7cmの間隔で広い。2は下甕である。口縁はくの字状でわずかに内湾する。端部は内面側にはねあげられた形状である。胴は卵形で底部はレンズ状になり境から0.6cm出ている。内面底は一段くぼむ。

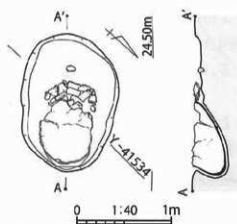
くの字の曲る部分に三角形の凸帯

と胴中央やや下にコ字形の凸帯が廻る。口縁端部と凸帯にはキザミが施される。調整は内面から外面の胴の上部は目が太いハケメ、中央から下部はハケメ、底部付近はハケメのあとナデである。凸帯の下に2本1単位のナデが施される。幅0.6-0.8cm、長さ約5.0cm、1.0-2.0cmの間隔で連続する。2から弥生時代後期後半の後葉と考えられる。

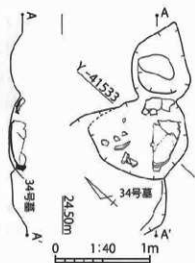
35号墓(第68図)は墓群西半の中央、32号墓の東にある。墓壇の底は丸く、中心が棺の外に出ており、形状はおおむね長い楕円形を想定できようか。長さ1.7m、幅1.1m、深さが0.2mの大きさの墓壇の北東半に甕棺を入れる墓壇を掘る。棺はほぼ水平に据えら



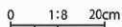
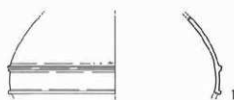
第65図 18号墓甕棺実測図(1/8)



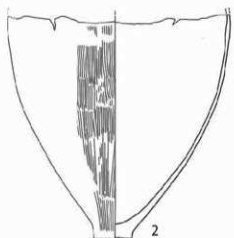
第 66 図 26 号墓実測図 (1/40)



第 68 図 35 号墓実測図 (1/40)



第 67 図 26 号墓竈棺実測図 (1/8)



第 69 図 35 号墓竈棺実測図 (1/8)

れる。34 号墓を切っている。34 号墓にかかる下甕の北西側半分は 34 号墓に向けて横倒しに広がるよう出土している。攪乱を受けたか、34 号墓の埋土が落ち込んだ可能性が考えられるが、34 号墓の掘形に沿っておおむね割れていることから後者の可能性が強いと推定する。

第 69 図 1 は上甕の壺である。第 68 図から打ち欠きと考えられるが出土状況では下甕と間があ

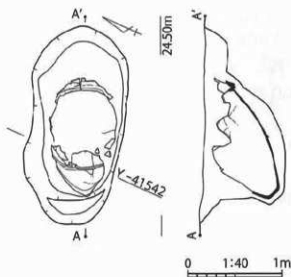
り、破面からははっきりと分らない。
底部は欠損している。凸帯は2条廻り、
上のものはコ字形で5.2 cm離れ下のもの
は端部が沈線状に深く凹む。調整は内外
面共にナデである。2は下甕である。南
筑後の甕棺の形態と考えられる。口縁は
打ち欠きではない可能性がある。内面底
はややくぼみがあり、外面底はやや凹ま
せている。外面調整のハケメは目の間隔
が広い。弥生時代中期と考えられる。

54号墓(第70図)は墓群西半の西、
51号墓の西、55号墓の北にある。甕棺
上部の墓壇は大きく崩れているが、形状
はおおむね長い楕円形と考えられる。長
さ2.1 m以下、幅1.0 m、深さが0.3 mの大きさの墓壇からさらに深さ0.6 mの甕棺を入
れる墓壇を南西に掘る。棺は急な角度に据えられる。

第71図1は下甕の蓋である。口縁の拡張は小さく、内面は三角形状に上面外側は強く
ナデられ凹む。外側も三角形状である。外面の口縁つけ根の整形は雑でしわや凹凸が目立
つ。口縁形態は日常土器の口縁と類似している。下甕と同様に他に比べ赤みがある焼きで
ある。2は下甕である。口縁はT字形で内面端部は丸く外側端部は上面とともに凹面で強
く立体的である。胴の上半はゆるく丸みがあり下部から底部にかけて砲弾形にすぼまる。
2条の凸帯は三角形で接しているところやや離れているところがある。下の凸帯が先に
貼り付けられている。外面調整はナデで内面はハケメ後ナデである。中央から下部にかけ
てところどころハケメが残る。他に比べははっきりと赤みが強い焼き上がりである。弥生時
代中期後半の前葉と考えられる。

56号墓(第72図)は墓群西端、55号墓の西、57号墓の北にある。短辺が丸く長辺が
直線の形状である。長さ1.7 m、幅1.0 m、深さが0.2 mの大きさの墓壇からさらに深さ0.4
mの甕棺を入れる墓壇を南西に掘る。棺は急な角度に据えられる。上甕を支えるような位
置に礎がある。

第73図1は上甕である。口縁を打ち欠かいているがくの字形に折れる部分がわずかに
残っている。胴は卵形をなすと思われるが下甕に比べ細長くなるかもしれない。頸部の屈
曲からわずかに下がった位置にキザミが施された三角形の凸帯が1条廻る。外面調整はタ
タキ後ナデで胴の中位にタタキが残る。内面はハケメである。内外面ともにハケメの目は
やや太く間隔はやや広い。胴の胎土の継ぎ目は擬口縁状でその部分で割れているところ
が多い。2は下甕である。口縁はくの字形に折れ屈曲は強くなく、直線的で比較的短い。端
部は四角くキザミが施される。頸部に傾いたキザミがある三角形の凸帯が1条廻る。胴は
卵形で器面の凹凸は強い。底は完全に丸底になっている。器壁は1 cmを超える。胴下部に



第70図 54号墓実測図(1/40)

コ字形の凸帯が1条廻る。キザミが×字状に施される。外面調整はタタキ後ナデで胴の上半にタタキが残る。内面はハケメである。頸部凸帯のキザミと内面底付近のハケメをのぞくハケメ・キザミ・タタキは目の太さや間隔が同じで同一の工具による可能性がある。古墳時代前期初頭と考えられる。

10. 21. 25. 52号墓

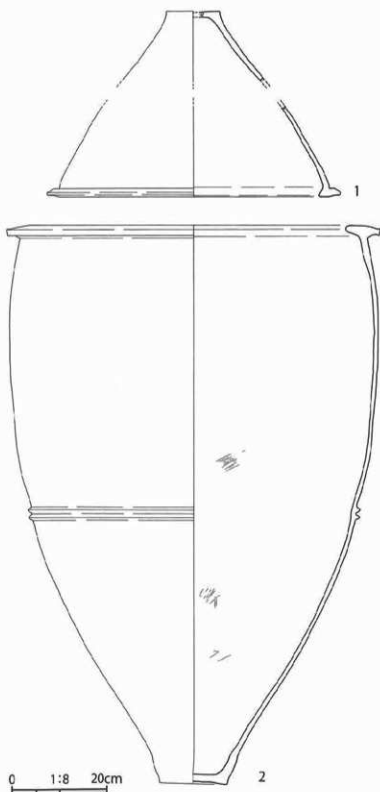
SK 20 (第74-83図 図版4の3 12の7. 8 13の1. 2)

墓壇の形状が不明のものである。検出面に甕棺が露出する。

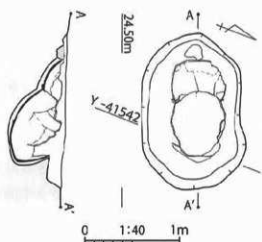
10号墓(第74図)は墓群東半の北より、12号墓の北、11号墓の西にある。60号墓に切られている。残存している甕棺を入れる墓壇の大きさは0.8m×1.1m、深さ0.5mである。棺はゆるい角度に据えられる。

第75図1は下甕の蓋である。口縁内側端部は短くとがり外側は丸みをもち全体として台形状である。沈線状に1本めぐるのが胎土を足した時の段差が残ったものかもしれない。胴部は比較的ゆるい角度で直線的にすばまる。外面調整はナデ、内面はハケメ後ナデである。口縁の上面に連続的に抑えたような凹みや幅が変わるなど整形

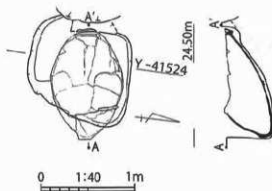
は丁寧ではない。2は下甕である。口縁は幅が狭いT字形で内側端部は丸く外側は凹面となり下部が厚みを増す。口縁よりわずかに丸みをもってふくらみ、胴中央付近より丸みをもってすばまり底部となる。全体的にわずかに丸みがある。底は厚いところで3.0cmあり、器壁は胴の中位より上部は1cmをこえ厚みがある。三角形の凸帯が口縁下に1条と胴に2条廻る。胴の凸帯は2.2cmの間隔で重なっている。調整は内外面ともにハケメ後ナデである。



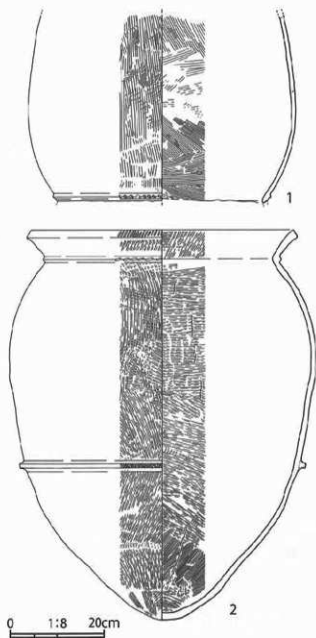
第71図 54号墓甕棺実測図(1/8)



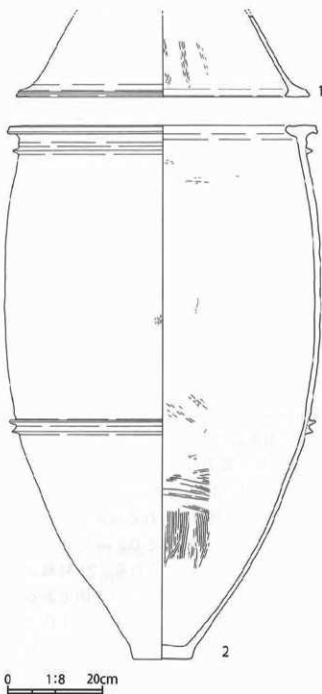
第72图 56号墓实测图(1/40)



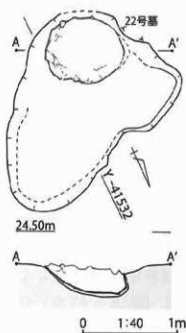
第74图 10号墓实测图(1/40)



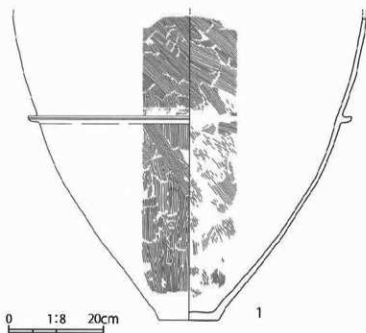
第73图 56号墓墓棺实测图(1/8)



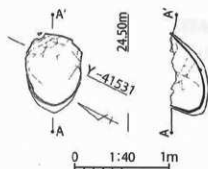
第75图 10号墓墓棺实测图(1/8)



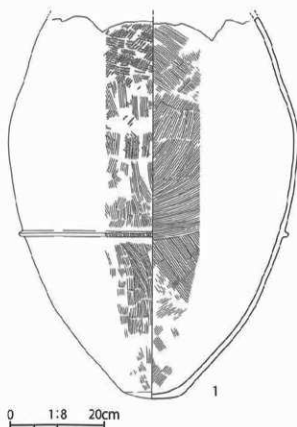
第76図 21号墓実測図(1/40)



第77図 21号墓壙実測図(1/8)



第78図 25号墓実測図(1/40)

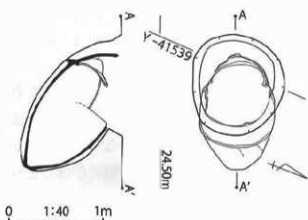


第79図 25号墓壙実測図(1/8)

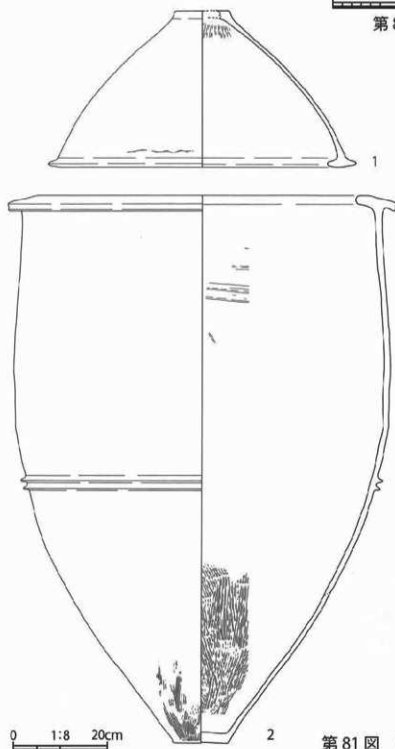
外面はハケメの痕跡はわずかで内面は下部によく残る部分がある。弥生時代中期後半の前葉と考えられる。

21号墓(第76図)は墓群中央の北より、24号墓の南東、19号墓の西にある。残存している甕棺を入れる墓壙の大きさは1.2m×0.7m、深さ0.3mである。棺はゆるい角度に据えられる。21号墓北東の土坑との切りあい関係は不明であるが、甕棺の出土状況から21号墓が上位である。第77図1は下甕である。胴の上部より上は欠損している。全体的にゆるく湾曲しすばまり底部となる。端部は沈線状にくぼむ。全体的にゆるく湾曲しすばまり底部となる。コ字形の高い凸帯が1条廻る。上反りが

顕著で、端部は沈線状にくぼむ。調整は内外面ともにハケメで内面は点状の小さな剥離が多く見えなくなっているところが多い。外面底から6 cm前後は工具によるナデが施されている。ヘラケズリにみえるものも多い。上部が不明であるが、形状から弥生時代中期後半の後葉から後期前半を推定する。



第80図 52号墓実測図(1/40)



第81図 52号墓甕棺実測図(1/8)

25号墓は(第78図)は墓群西半の南中央、20号墓の南にある。残存している甕棺を入れる墓壇の大きさは0.8 m×0.6 m、深さ0.4 mである。棺は急な角度に据えられる。

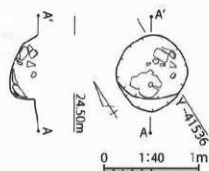
第79図1は下甕である。口縁下より上部を打ち欠いている。全体的に梨型をしているがゆがみは大きい。胴の最大径のやや下に1条のコ字形の凸帯が廻る。幅が広いキザミが施される。底部はレンズ状に丸みがある。底との境となる稜は明瞭で境から0.7cm出ている。外面調整は上部がタタキのちハケメで、中央から下部はハケメでタタキ痕は見えない。底部はハケメのあとナデである。また凸帯が剥離した部分ではタタキ痕が明瞭である。内面は目が太いハケメである。弥生時代後期後半の末と考えられる。

52号墓(第80図)は墓群西半の北より、51号墓の南、55号墓の東にある。残存している甕棺を入れる墓壇の大きさは1.1m×1.0m、深さ1.1mである。棺は急な角度に据えられる。

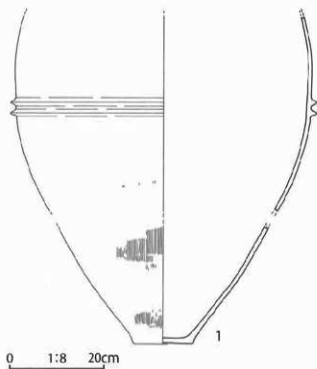
第81図1は下甕の蓋である。口縁はT字形で内面端部は丸みが強い四角形で、外側への出は弱く端部はとがるように丸い。口縁上面は丸みがある。口縁下の整形はよくない。段が残り胎土の継ぎ目が消えていない。口縁下から丸みをもって強くすばまり底との境は明瞭である。内外面の調整はナデで痕跡がはっきりと残る。内面底から立ち上がる部分に目が太く間隔が広いハケメが残る。2は下甕である。口縁はT字形で内側への出がはっきりと長い。外側に低く傾斜する。内側端部は丸く、外側はゆるい凹面である。全体として砲弾形をなし、口縁下より直線的な胴部となり、胴中央部からすばまりゆるい弧となりながら底部となる。胴の中央に小さめの三角形をした2条の凸帯が間隔1.8cmで廻る。調整はハケメのあとナデと思われる。外面は底部に、内面は底部から胴下部と胴の上部にハケメ、ハケメのあとが残る。内面のハケメは目が太く間隔は広い。弥生時代中期後半の前葉と考えられる。

SK20(第82図)は墓群西半の中央、51号墓の南東ある。残存している甕棺を入れる墓壇の大きさは0.8m×0.7m、深さ0.2mである。棺は急な角度に据えられる。当初は土器が土坑内に散乱する出土状況から祭祀土坑と考えられていたが、斜めに座する土器の底部が出土したため甕棺墓とされたと思われる。遺物ラベルには33号墓と38号墓と書かれたものがある。SK20以外の甕棺の底部であるべきものはそろっており、残存状況や形状からSK20の遺物と考えることができるためSK20の遺物として取り扱う。

第83図1は下甕である。打ち欠きかどうかわからない。丸みを帯びた器形である。最大径より下がったところに2条の三角形の凸帯が2.6cmの間隔で廻る。外面調整はハケメ後ナデで下部に带状にハケメが残る。内面はナデである。石英、長石の砂礫が目立ち、砂礫の構成が異なり他地域のものの可能性が高い。弥生時代中期と考えられる。



第82図 SK20 実測図 (1/40)



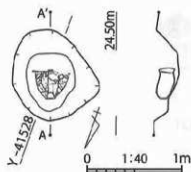
第83図 SK20 甕棺実測図 (1/8)

50・59号墓（第29・84・85図 図版8の7 13の3）

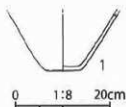
甕棺が小さいものである。50号墓（第84図）は墓群中央の南より、47号墓の西、32号墓の南東にある。残存している甕棺を入れる墓壙の大きさは1.0m×0.8m、深さ0.3mである。墓壙の形状は円い。棺は水平に据えられる。

第84図1は下甕である。日常土器の甕である。口縁はくの字に近づいているが、内面への出ははっきりと残っている。

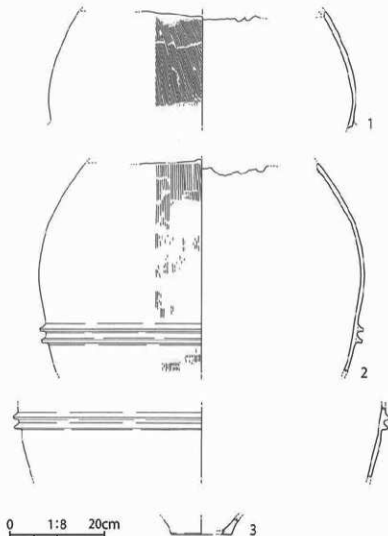
胴の上部はゆるく膨らみ、下部は直線的に底となる。外面調整はハケメ、内面はわからないところが多いが上半はハケメ、下半はナデである。弥生時代中期後半の後葉に併行すると考えられる。



第84図 50号墓・甕棺実測図
(1/40 1/8)



第85図 59号墓甕棺実測図(1/8)



第86図 遺構不明甕棺実測図(1/8)



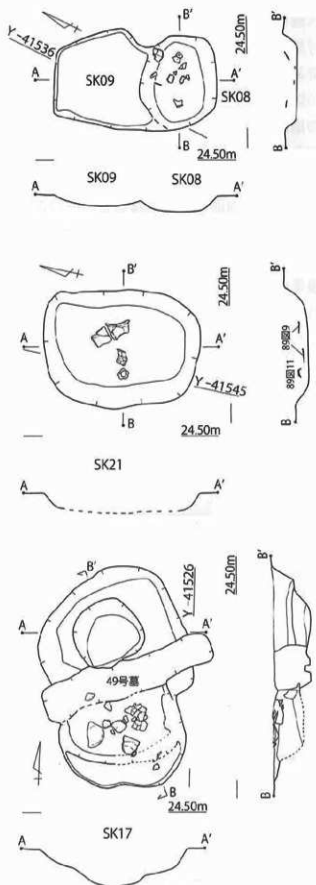
第87図 03・14・20号墓遺物実測図(1/2 1/4)

59号墓(第29図)は墓群中央の西より、21号墓の南、22号墓の東にある。23号墓との切りあい関係は不明である。遺物の出土状況から23号墓に切られている可能性が高い。残存している甕棺を入れる墓壇の大きさは0.2m×0.2m、深さ0.1mである。棺は急な角度に据えられると思われる。

第85図1は下甕である。残存は底部のみである。底径から甕棺としては小型である。外面調整は目が細かいハケメがわずかにみられる。剥離が多く不明なところが多いがハケメのあとナデの可能性もある。内面はナデである。弥生時代中期と考えられる。

第86図は該当遺構が分からない遺物である。ラベル不明と書かれており当調査区では上記の甕棺墓しかないため、それらの甕棺の一部となる可能性が最も高い。特定することができなかったため第86図に遺構不明遺物として掲載する。

1は凸帯から上の破片で上部は打ち欠きである。凸帯は残っていないが貼り付けたあとが残る。最大径からやや下がったところに1条確認できる。外面調整はハケメで目が細かく幅が1mmに満たないところが多い。内面は上部が工具による水平方向のナデ、下部はナデである。2は口縁下より上部を打ち欠いている。最大径より下がったところに2条のはっきりとしたコ字形の凸帯を2.4cmの間隔で廻らせる。外面調整は目が太いハケメ。器面の荒れが多い。内面は上部が工具によるナデ胴中央から下部はナデである。3は凸帯付近と底部の破片である。三角形の凸帯が2.2cmの間隔で廻る。外面調



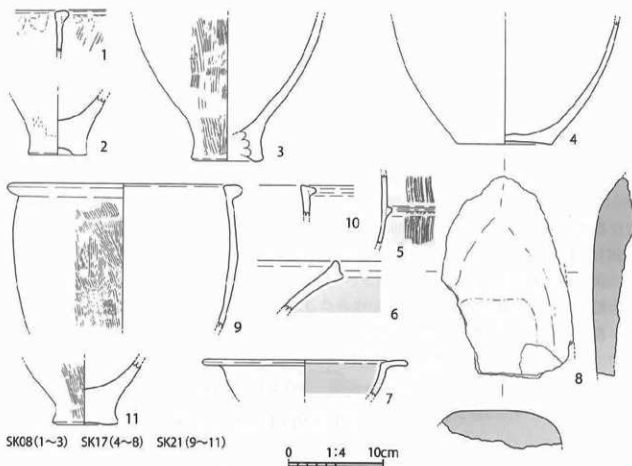
第88図 SK08・09・17・21 実測図(1/40)

整はナデ、内面は摩耗により不明、底は未調整である。非常に離れた破片であるが同一のコンテナに入れられたもので焼き・胎土が同じであるため同一個体と考えられる。

SK08. 21 (第88図 図版13の4. 5 遺物 第89図1-3 9-11)

弥生時代中期前半の土坑である。調査区の西辺に分布する。SK08は調査区の北西隅、SX01の南にある。長さ1.0 m、幅0.8 m、深さ0.2 mの大きさで、円く底も丸みがある。SK09との切りあい関係は不明である。第89図1-3の弥生土器が出土している。1は甕の小片である。口縁凸帯の下部にユビオサエが連続している。2と3は甕である。ともに丸い上げ底である。3は胴の下部で丸みが強い。底部のナデは丁寧で、外面調整はあれておりひび割れが多い。

SK21は調査区の南西隅、墓群の西端、55号墓の北東にある。長さ1.7 m、幅1.2 m、深さ0.2 mの大きさの丸みが強い長方形で、底も丸みがある。中央あたりから第88図9-11の弥生土器が底付近から出土した。9は甕で口縁はすべて残存している。口縁は口径24.2-26.1 cmの楕円形である。口縁外面を厚く短く肥厚させている。10は甕の口縁部小片である。端部に接して凸帯をつける。11は底部でわずかに上げ底となる。9の底部となる可能性がある。墓群にある土坑として載せてもよかったが遺物の出土状況から墓の可能性は低いと考え別にした。



第89図 SK08・17・21 遺物実測図 (1/4)

SK07, 09, 10, 11, 12, 13 (第88, 90図 図版3の7 13の6-8)

調査区の北西隅にある土坑である。調査区西辺には弥生時代中期前半の遺構が存在し、ほかの時期と分かる遺構はないためその時期の遺構の可能性はあるが、図示できる遺物の出土はなく時期は不明としておきたい。

SK07は調査区の北西隅、SX01、SK08の南にある。長さ1.3m、幅0.7m、深さ0.1mの大きさで、形状は楕円形で底は丸みがある。

SK09(88図)は調査区の北西隅、SX01の南にある。長さ1.0m以上、幅1.1m、深さ0.1mの大きさで、東辺がくの字にふくらむ長方形が想定される。底は丸い。SK08との切りあい関係は不明である。

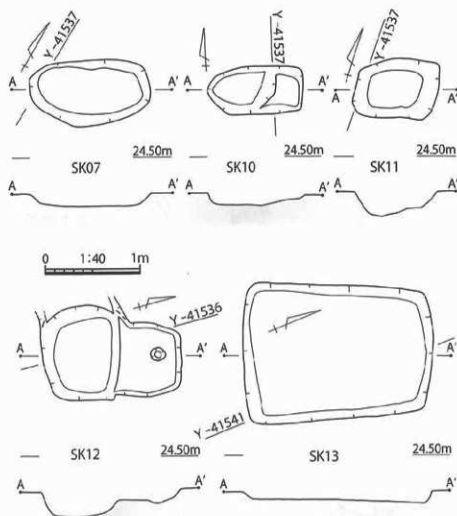
SK11は調査区の北西隅、SX01の東、SK10の北にある。長さ0.9m、幅0.8m、深さ0.3mの大きさで、四角い形状である。底は丸みがある。

SK12は調査区の北西隅、SX01の北東、SK11の北にある。長さ1.5m、幅1.0m、深さ0.3mの大きさで、

形状は丸みがある縦長の台形状である。底は二段で南側が深く底は丸い。北側の底は平坦である。SX01との切りあい関係は不明である。

図上からは南半の深い部分はSX01の可能性はあるが、現場の判断のとおりとしておく。掘形がSX01の影響を受けているとすれば、SX01のほうが古い可能性がある。

SK13は調査区の西隅、SK08の南西にある。長さ2.0m、幅1.5m、深さ0.1mの大きさで、形状は四角形である。おおむね底は平坦である。



第90図 SK07・10・11・12・13 実測図 (1/40) 135×120

(3) 総括

発掘調査の結果、古代では掘立柱建物2棟、竪穴建物2軒、竪穴建物の可能性があるもの1基、土坑5基、古代から弥生時代中期後半の溝1条、弥生時代中期後半から古墳時代前期初頭の墓群（箱式石棺墓1基、石蓋土壇墓2基、木棺墓の可能性のあるもの1基、木蓋土壇墓3基、木蓋土壇墓の可能性のあるもの2基、甕棺墓28基、土壇墓24基の計61基）、円形周溝状？1基、弥生時代中期前半の土坑が2基確認された。ほか時期不詳の土坑20基、溝状遺構1条、多数の小穴、落ち込みが見つかった。

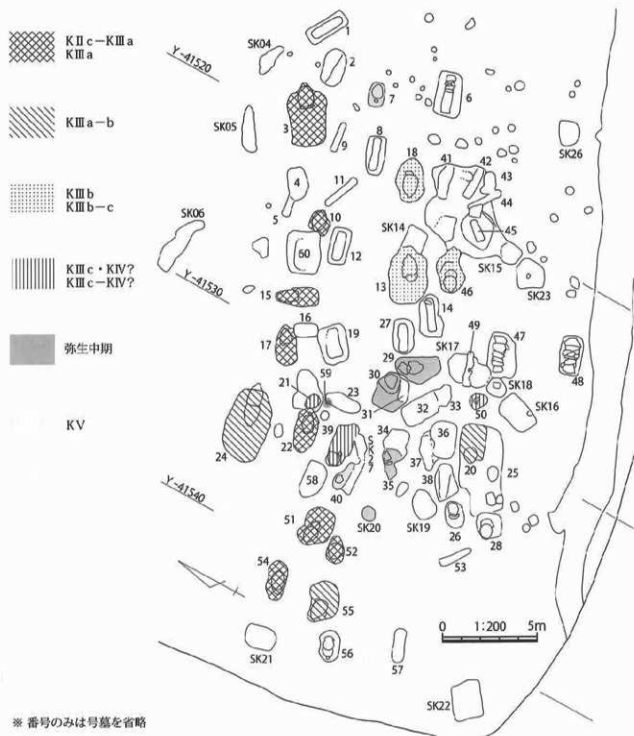
中でも総数61基の墓群が当遺跡の中心である。墓群の理解のために第91図に甕棺の形式別の分布図を、第92図に方位からみた分類図を示す。甕棺の形式については橋口達也氏の『甕棺と弥生時代年代論』2005を参考させていただいた。認識不足による誤りも多いかと思われるが今後のたたき台になればと思う。

主に下甕からみていきたい。もっとも古相を示すものは口縁部や胴の上部が直線的な形態から52号墓甕棺である。当地域では口縁下の凸帯の有無が形式のKⅡとKⅢ期の分類指標とならないが、KⅢa期の下甕の器高が110—120前後cmのもの（03号・10号・54号・55号墓）、100cm前後のもの（15号・17号・22号）ものがあり、器高の点から52号墓甕棺はKⅢa期ととらえた。03号墓の下甕は丸みを帯びた器形で横幅があり非常に大きい。墓群の北西側に列をなして墓群の端から端まで広がる。全体的に丸みを帯び始めた器形や口縁の形状から24・55号墓甕棺はKⅢa—b期とした。まだ口縁の上面は水平であり、KⅢa期と考えるべきかもしれない。下甕の器高は120cm前後である。24号墓は上甕も同様の器形の合せ口で総長240cmと大きく墓壇も極めて大きい。20号墓甕棺は口縁内側を打ち欠いており形状が分からないがやや下に向く傾向が推定されここに含めた。丸みを帯びた器形で下甕の器高が85cmである。墓群の西部に分布する。KⅢb期はKⅢc期に下る可能性があるものを含め、下甕の器高が13号・18号墓は110—120cm、46号墓は推定で100cmをこえない。墓群の東部に分布する。K3c—Ⅳ？期とした甕棺は口縁下より打ち欠かれ、口縁部形態は分からない。21号墓甕棺は内外面の調整がハケメ、底部のみナデで高い1条のコ字状凸帯を廻らすこと、39号墓甕棺は胴の上半の曲りが強く下半はふくらみがやや強く、底径が比較的大きいことから判断した。器高は90cmを越えない。50号墓は成人用甕棺ではなく器高が26cmの日常土器の甕で乳児が納められたと思われる。くの字口縁の形であるが内面への出は小さいながらもはっきりとしており、KⅢc期に併行する。墓群の中央に分布する。弥生中期としたもの（29号・30号・SK20）は口縁部形態が不明である。丸み帯びた器形ではないかと考える。35号墓は底部が細く引き締まる形状から南筑後のKⅡ—KⅢ併行の甕棺と思われる。外面はハケメ、内面はナデ調整や胴下半の形状は弥生時代中期の日常土器と同様である。器高が口縁下より打ち欠かれた残高が47cmと大きく底部が脚台状になっていないことが異なる点である。蓋に壺が用いられており大きさから成人用ではないと思われる。墓群の中央西よりに分布する。

KⅢ—Ⅳ期にかけての傾向は墓群の北西に直線的に列を作り始めること、次に北東よりに移ること、中央西よりで器高が砲弾形のものより低い丸みを帯びた器形のものや下甕に

打ち欠きのあるものが分布すること、中央西よりで成人用ではない甕棺墓がつくられること、KⅣ期には甕棺墓が少ないことが特徴としてあげることができる。

KⅤ期の甕棺は墓群の東に1基と西に5基の6基ある。下甕についてKⅤd期は26号墓で器高74cmあり、KⅤe期は25号墓で、器高推定90cmをこえない。共に墓群の南西部に位置する。KⅤf期は3基あり07号墓が器高84cm、28号墓が器高97cm、56号墓82cmが墓群の東西の端に点在する。40号墓は残存が悪く細分できない。KⅤ期の傾向は墓群の端に位置すること、前半に甕棺墓がないこと、成人用でない甕棺が見つかっていない



第91図 甕棺形式分布図

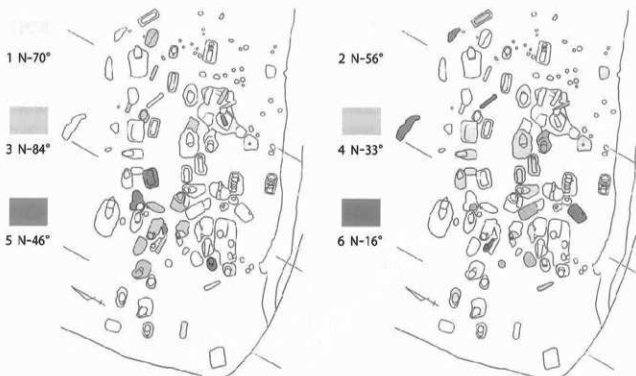
こと、下甕を打ち欠くことが少ないこと、また打ち欠くとき割付線を入れるものがあること(07号墓上甕、28号墓上甕)が特徴としてあげることができる。

第92図は方位による分類図である。墓だけではなく時期不明で向きを計測できる土坑を含めている。SK21は弥生時代中期前葉の土坑であるためのぞいている。長軸線が西に向くもの、甕棺等で軸の向きが分かるものもすべて北から東に何度傾いているかに置き換えている。集まりは見た目で分けたのち、計測した値を参考に分類した。甕棺墓は墓墳で分類している。墓墳が分からない甕棺墓は甕棺で分類している。

第91図を併せてみていきたい。分類1は平均 $N-70^{\circ}$ で22基あり数値のまとまりはよい。誤差が大きいもので12号墓の $+5^{\circ}$ である。56号墓がKⅢa期で墓墳が不明で急傾斜に甕棺が設置されるため誤差が大きいと考えられるためのぞくと、KⅢa-KⅢb、KⅢb、KⅢc期とした甕棺を含む。またKV期の6基のうち4基を含む。特にKVf期の3基はすべて分類1に入る。箱式石棺墓1基、石蓋土壙墓2基の全てが分類1である。

分類2は平均 $N-59^{\circ}$ で19基あり数値のまとまりはよい。もっとも誤差が大きいもので60号墓の $+5^{\circ}$ で分類1に近い。46号墓は甕棺を含めた配置から分類2に含めるべきかもしれない。SD01の向き($N-60^{\circ}$)に近く同じといえる。56号墓、墓墳の形状が不明瞭な10号墓をのぞき、55墓以外のKⅢa期とした甕棺墓のすべてが該当する。SD01は段丘状の高まりから南の谷状の低地に落ちかかる位置にある溝で弥生時代中期には機能していたと思われるためもっとも数が多くなると想像していたがそうではなかった。

分類3は平均 $N-84^{\circ}$ で14基あり数値のまとまりはよい。もっとも誤差が大きいもので42号墓の $+5^{\circ}$ である。KⅢa期の55号墓、弥生時代中期の35号墓、KⅢc-KⅣ?期の39号墓を含む。南西部に分布しない。



第92図 墓群域方位分類図

分類4は平均N-33°で8基あり数値のまとまりはあまりよくない。もっとも誤差が大きいもので21号墓の-7°である。21号・01号墓をのぞくとまとまりはよくなる。青銅器鉢が出土した弥生時代後期の32号墓を含む。分類6は平均N-16°で5基あり数値のまとまりはあまりよくない。もっとも誤差が大きいもので11号墓の+6°である。弥生時代後期後半の40号墓を含む。地形とおおきくはずれた方位となっている点から分類4と6はひとつくりにとらえる。調査区全体に散漫に分布する。甕棺墓の3基(21号・46号墓・SK20)を上述と同様にのぞいて考えるとより一層散漫さが目立つ。

分類5は平均N-46°で5基あり数値のまとまりはよい。もっとも誤差が大きいもので45号墓の-5°である。墓群の中央付近に分布するが密集しているとはいえない。

墓の中には配置から隣あうと考えられるものがある。13号墓と46号墓、15号墓と16号墓、18号墓と42号墓、20号墓と36号墓、22号墓と24号墓、30号墓と33号墓、47号墓と48号墓、03号墓とSK05(SK05は墓と認識されていない)である。近接した時期の遺構と考えることができると思われるが、甕棺墓同士の組み合わせである13号墓と14号墓、22号墓と24号墓は大きな矛盾はない。

墓群の形成について考えると、弥生時代中期後半に北東側から地形に合わせて(方位分類2)分布し始め結果として列をなす。中央部にも規模が比較的小さい墓を中心として列状に展開する。遅れてやや向きを異にする(方位分類1、3)ものが広範につくられるようになり主流は分類2が占める。弥生時代後期には地形と向きを異にする(方位分類4、5、6)ものが既存の墓の隙間を埋めるように現れる。といった傾向がうかがえる。墓の向きは地形や区画、既存の墓、習慣等に影響され個々の墓の造墓について一律に考えることはできないが、当遺跡では時期を想定できない甕棺墓以外でもある程度の推定は可能ではないかと思われる。

当遺跡では墓群は集落と隔絶しており、また墓群西端は遺構が希薄になり調査区外に大きく広がることはないと考えられ、墓群の全容をほぼ知ることができる。地形的には段丘の先端付近に位置し南と西は谷状の低地である。弥生時代中期後半から古墳時代初頭まで継続して営まれたと考えることができる。当遺跡北部の状況は分かっていないが造墓主体の集落は弥生時代中期では二反田遺跡や宮ノ前遺跡であると考えることが自然である。両遺跡に弥生時代中期の小型の甕棺墓や箱式石棺墓が点在する。当遺跡で成人用でない甕棺墓や小型の土壇墓が少ないことを補うようにも思える。弥生時代後期から古墳時代初頭の時期には両遺跡に加え京田遺跡1次、3次の調査区も候補に挙がる。深田遺跡で突出部のある環壕のSX05がつくられる頃には当遺跡の墓群は終焉している。

32号墓に副葬された「鉛鉢」が出土している。岩戸山歴史交流館で現在展示されている。また14号墓で磨製石鏃が副葬される。八女市域で弥生時代の副葬品をもつ墓は北西に2.7kmはなれた亀ノ甲遺跡、東南東に1.1kmはなれた茶ノ木ノ本遺跡、西南西に2.3kmの新庄・六反田遺跡で見つкаっている。亀ノ甲遺跡では3号石蓋甕棺からイモガイの貝輪6、10号石蓋甕棺から素環頭鉄刀1、21号石棺付近から内行花文仿製鏡1、可能性があるものとして5号石棺東から袋のある鉄斧、ほかに鉄剣、鉄斧が出土している。茶ノ木ノ本遺跡

では5号甕棺から細型銅剣、3号甕棺から後漢鏡・鉄戈、9号甕棺からガラス玉100個近くが出土している。新庄・六反田遺跡では甕棺墓のK-6から石剣の切先が出土している。青銅器の副葬は弥生時代後期の墓で発見されている。

八女市域で弥生時代を中心とした墓で、群や列をなしている遺跡は下の表にあげておく。

遺跡名	所在	報告書	図-2	発行年	編集機関
亀ノ甲遺跡	室岡	亀ノ甲遺跡 九州縦貫自動車道埋蔵文化財報告書XIX	八女市(第1集)	1964 1977	八女市教育委員会 福岡県教育委員会
曲松遺跡	立花町北山	曲松遺跡	立花町第2集	1985	立花町教育委員会
北小路遺跡	室岡	八女市史上巻 p.183-189		1992	八女市史編さん専門委員会
岩崎遺跡群	岩崎	八女市史上巻 p.191-192		1992	八女市史編さん専門委員会
熊野遺跡	馬場	熊野遺跡	八女市第26集	1993	八女市教育委員会
松ノ本遺跡	柳瀬	埋蔵文化財調査概報5	八女市第34集	1994	八女市教育委員会
茶ノ木ノ本遺跡	柳瀬	埋蔵文化財調査概報5	八女市第34集	1994	八女市教育委員会
西原遺跡	平田	八女東部地区埋蔵文化財発掘調査概報2	八女市第45集	1996	八女市教育委員会
辻の西遺跡	吉田	辻の西遺跡(第2次調査)	八女市第51集	1998	八女市教育委員会
西山ノ上遺跡2次	室岡	西山ノ上遺跡(1・2次調査)	八女市第70集	2004	八女市教育委員会
楠町遺跡2次	納楚	埋蔵文化財調査報告書IV	八女市第84集	2009	八女市教育委員会
新庄・六反田遺跡	新庄	八女市内遺跡群1	八女市第104集	2014	八女市教育委員会

古代では調査区の東半にかたよって遺構が分布する。掘立柱建物と土坑は遺構の軸線と方位が北を向いて東にややずれる。竪穴建物はほぼ方位にあった軸線である。遺物の出土がなく時期を明らかにしえないが、建物の形態からも時間差が想定できる。当調査区の北西端から東へ約50mから深田遺跡の調査区となり、京田遺跡1次、3次へ続く。深田遺跡の西端から約230mにわたり、古代の遺構が見つかった。掘立柱建物2棟、竪穴建物62棟で奈良時代のものである。当調査区とほぼ時期が重なると考えられ、この地区における古代のなかでも8Cの集落の西端にあたるといえよう。SD01の溝の続きがどこまで不明であるが、深田遺跡、京田遺跡では見つかっていない。当遺跡の南の谷状の低地をはさんだ南側の二反田遺跡、宮ノ前遺跡、水洗遺跡では集落といえる古代の遺構はなく、土坑や宮ノ前遺跡で火葬場跡と考えられている遺構が点在するのみである。

古代の中の方形でまっすぐに掘り込まれた4基の土坑がある。SK01では底からやや浮いた地山ブロックが多く混じる層からの完形の土師器の坏、口縁が4分の1欠損した須恵器の皿が出土しており、遺構が埋められるときに入れられたもので、埋め戻しの祭祀があったと思われる。ほかの遺構ではほぼ底に接して出土しており、器種や、残存が異なるものがあるが、同様に考えることができるのではなかろうか。遺構の性格を特定することはできないが、遺構機能が停止するまで相応の時間があることが考えられ、祭祀土坑や廃棄土坑のような目的で掘られたものではないと考えておきたい。近隣の袴田遺跡は当遺跡と同時期の遺構が見つかり、遺構数は多く遺構内容は似かよっている。同様の遺構が8基見つかった。階段状に張り出す遺構があり、貯蔵穴の可能性を推定しているものがある。

この地域において圃場整備によって多くの発掘調査が行われ、また調査面積も広い。調査報告書も順次刊行されている。遺跡間を通視し、ここで暮した人々の姿をとらえるには力が及ばないが、検討がすすみ少しでも歴史が明らかにされていくことを望む。

表1 遺構一覧表 1

神祠	断面	遺 構	規 模 (m)				方 位	位 置	方 格 分類 第1	遺構以外 形状 ※2	遺構 上部基礎 形状詳	備 考	
			長辺・長軸 最大径	短辺・短軸 最小径	短辺・短軸 最大径	間さ (掘出 面、断面)							
			○台形は2辺・L字・コ字はそれぞれ創記										N・O・E・W
5	2.3	SB04	竪立柱建物	6.12	4.95	—	N-7° -E				3間×2間 1間庇?		
5		SB04P02	柱穴	0.43	0.27	0.14	—						
5		SB04P03	柱穴	0.84	0.30	0.15	—						
5		SB04P05	柱穴	0.60	0.50	0.19	—						
5		SB04P06	柱穴	0.50	0.45	0.23	—						
5		SB04P07	柱穴	0.64	0.43	0.25	—						
5		SB04P31	柱穴	0.45	0.38	0.17	—				新規遺構番号		
5		SB04P32	柱穴	0.45	0.43	0.25	—				新規遺構番号		
5		SB04P33	柱穴	0.50	0.47	0.26	—				新規遺構番号		
5		SB04P34	柱穴	0.47	0.40	0.21	—				新規遺構番号		
5		SB04P35	柱穴	0.48	0.45	0.23	—				新規遺構番号		
5		SB04P36	柱穴	0.75	0.55	0.28	—				新規遺構番号		
5		SB04P37	柱穴	0.35	0.27	0.15	—				新規遺構番号		
5		SB04P38	柱穴	0.25	0.27	0.20	—				新規遺構番号		
5		SB04P39	柱穴	0.45	0.22	0.18	—				新規遺構番号		
6		P 01	小穴	0.20	0.20	0.15	—						
6	2.4	SB05	竪立柱建物	3.05	3.06	—	N-14° -E				2間×2間 新規遺構番号		
6		SB05P40	柱穴	0.57	0.33	0.15	—				新規遺構番号		
6		SB05P41	柱穴	0.41	0.30	0.08	—				新規遺構番号		
6		SB05P42	柱穴	0.47	0.41	0.25	—				新規遺構番号		
6		SB05P43	柱穴	0.42	—	0.25	—				新規遺構番号		
6		SB05P44	柱穴	0.38	0.33	0.14	—				新規遺構番号		
6		SB05P45	柱穴	0.39	0.32	0.26	—				新規遺構番号		
6		SB05P46	柱穴	0.39	0.38	0.14	—				新規遺構番号		
6		SB05P47	柱穴	0.44	—	0.19	—				新規遺構番号		
7	2.5	SB01	竪式建物	2.80	2.75	0.06	N-5° -W				SB02 に切られる カマド		
8	2.6 2.8	SB02	竪式建物	2.90 3.38	3.24	0.14	N-2° -W				SB01 を切る カマド		
9	7.8	SB03	竪式建物?	—	—	0.12	—						
10	3.1 3.2	SK01	土坑	1.80	1.78	0.30	N-30° -E	—					
10	3.3 3.4	SK02	土坑	1.40	1.37	0.23	N-70° -W	—					
10	2.7	SK03	土坑	1.12	1.07	0.40	N-16° -E	—					
11	3.5	SK25	土坑	1.38	1.29	0.41	N-5° -E	—					
11	3.6	SK24	土坑	残1.38	残0.80	0.30	N-44° -W	—			SDC1 を切る		
13	3.8	SD01	溝	45.00	0.85-1.40	80.00	N-60° -E				SK24 に切られる		
13		SD02	溝状遺構	残2.70	0.25	0.19	N-28° -W						
13	3.7	SK01	円形周溝?	推定 4.40	0.55-0.90	0.14	—				SK12 との切りあい不明		
18	5.1 6.1 6.2	47号基	竪式石棺	上2.43 下2.06	上1.58 下0.55	上0.17 下0.41	N-69° -E	1	竪式石棺 二段A		SK17 に切られる SK18 との切り あい不明		
19	6.7 6.8	06号基	石蓋土壇	上2.40 下2.07	上1.33 下0.50	上0.31 下0.24	N-73° -E	1	石蓋 二段A				
19	5.2 6.3 6.4	48号基	石蓋土壇	上2.10 下1.81	上1.22 下0.63	上0.22 下0.31	N-68° -E	1	石蓋 二段A				
20	6.6	19号基	木棺?	上2.07 下1.56	上1.48 下0.74	上0.17 下0.10	N-40° -E	5	竪式石棺 土壇				
20	4.3 4.4	60号基	土壇	上2.26 下1.68	上1.76 下0.617	上0.17 下0.06	N-64° -E	2	竪式石 段?土壇		10号基を切る		

表1 遺構一覧表 2

陣別	図号	遺 構	掘 削 (m)			方 位		基 礎		備 考
			長辺 最大径	短辺 長さ	短辺 最小径	深さ (掘削 面、或底面)	長軸 (掘削 面)・方位	方位 分限 ※1	基礎以外 ※2	
			○右側は2辺、L字・コ字はそれぞれ併記			N・O°・E・W			上部基礎 詳細計	
21	4.6	45号墓	土溝	上1.00+ 下1.17	上0.72+ 下0.43	上0.42 下0.09	N-41°・E	5	中継段土溝	
21		45号墓土溝	土坑	2.40+	1.74+	残0.42	—			45号墓と分ける
24	4.7 4.8	01号墓	水堀土堀	上2.31 下1.81	上0.83 下0.52	上0.12 下0.30	N-62°・W	4直角	水堀 二段A	
24	7.5	08号墓	水堀土堀	上2.05 下1.75	上1.04 下0.41	上0.05 下0.32	N-72°・E	1	水堀 二段A	
23	4.3 4.5	12号墓	水堀土坑	上1.96 下1.53	上1.02 下0.56	上0.14 下0.25	N-75°・E	1	水堀 二段A	
24	7.1 7.2	14号墓	水堀土堀?	上2.26 下1.79	上1.28 下0.45	上0.14 下0.21	N-57°・E	2	水堀? 二段A	赤賀石堀
24	7.3 7.4	27号墓	水堀土堀?	上1.87 下1.51	上1.13 下0.49	上0.20 下0.22	N-59°・E	2	水堀? 二段A	
25	7.6	02号墓	土溝	上2.00 下1.89	上1.15 下0.56	上0.32 下0.08	N-83°・E	3	幅広土溝 浅段	
26	8.8	37号墓	土溝	上2.09 下1.83	上覆0.90 下0.56	上0.10 下0.29	N-56°・E	2	二段B	36号墓に切られる
26	7.7	38号墓	土溝	上2.05 下2.01	上0.95-1.18 下0.44	上0.06 下0.23	N-66°・E	1	二段B	
26	7.8	41号墓	土溝	上1.92+ 下1.83	上1.09 下0.48	上1.07 下0.26	N-73°・E	1	二段B	
26	7.8	42号墓	土溝	1.78	上残1.10 下0.45	上0.12 下0.10	N-89°・E	3	二段B	
27	5.3 6.5	32号墓	土溝	2.13+	1.17	0.34	N-59°・W	4直角	中継土溝	33号墓との切りあい不明 助降
28	8.6	05号墓	土溝	残1.05	0.40	0.18	N-83°・E	3	狭長土溝	04号墓との切りあい不明
28	7.5	09号墓	土溝	1.67	0.31	0.17	N-83°・E	3	狭長土溝	
28	8.1	11号墓	土溝	2.10	0.35	0.23	N-68°・W	6直角	狭長土溝	
28	8.2	44号墓	土溝	1.98	0.31+	0.24	N-54°・W	4直角	狭長土溝	SB43との切りあい?
28	8.3	49号墓	土溝	1.88	0.38	0.36	N-71°・E	1	狭長土溝	SK17との切りあい不明
28	8.4	53号墓	土溝	1.81	0.40	0.11	N-55°・W	4直角	狭長土溝	
28	8.5	57号墓	土溝	1.83	0.60	0.35	N-69°・E	1	狭長土溝	
29	8.6	04号墓	土溝	1.72	1.02	0.50	N-57°・E	2	幅広土溝	05号墓との切りあい不明
29	8.7	23号墓	土溝	1.95	0.85	0.11	N-6°・W	3直角	幅広土溝	遺物の残存から59号墓を切るか
29	12.4	34号墓	土溝	残1.30	1.10	0.29	N-82°・E	3	幅広土溝	35号墓に切られる 写真から長軸1.50mを超える
29	8.8	36号墓	土溝	2.00	1.08 1.45	0.37	N-69°・E	1	幅広土溝	37号墓を切る
29	9.1	58号墓	土溝	2.01	1.14	0.28	N-83°・E	3	幅広土溝	
29	11.2	16号墓	土溝	1.29	0.77	0.24	N-30°・W	2直角	土堀小	17号墓との切りあい不明
40	10.6	31号墓	土溝	1.22+	0.56+	0.42	N-67°・E	1	土堀小	30号墓との切りあい不明
27		33号墓	土溝	1.16	残0.60	0.22	N-70°・E	1	土堀小	32号墓との切りあい不明
29	7.8	43号墓	土溝	1.19	0.63 0.82	0.23	N-59°・E	2	土堀小	SB44との切りあい?
88	8.3	SK17	弥生土坑	2.27	1.58	0.41	N-3°・E	—		47号墓を切る
30	9.2	SK14	土坑	残1.22	1.12	0.17	N-82°・E	3		13号墓との切りあい不明
30	9.4	SK16	土坑	2.04	1.32	0.06	N-21°・E	6		
30	9.5	SK19	土坑	1.55	1.20	0.12	N-36°・E	4		
30	9.6	SK22	土坑	2.01	1.60	0.10	N-58°・E	2		
30	9.3	SK23	土坑	1.57	1.48	0.17	N-59°・E	2		
30		SK26	土坑	1.32	1.08	0.09	N-59°・E	2		新掘遺構番号
30		SK27	土坑	1.10	0.55	0.05	N-47°・E	5		新掘遺構番号
76	12.7	21号墓北側	土坑	2.05	1.20-1.53	0.12	N-47°・E	5		
30	9.3	SK15	土坑	1.12+	1.10	0.32	N-5°・E	—		SB03との切りあい不明
30	13.3	SK18	土坑	1.04	0.97	0.24	N-9°・E	—		47号墓との切りあい不明
31	9.7	SK04	土坑	1.85	0.80	0.30	N-75°・W	6		
31	9.8	SK05	土坑	2.50	0.73	0.30	N-60°・E	2		

表1 遺構一覧表 3

神岡	図版	遺 構	規 模 (m)			方 位		方位分類 ※1	説 明		備 考
			長辺 最大・長さ	短辺 最小・幅	深さ(掘出 面・底面)	長軸(南偏 北・東・西)	短軸(南偏 北・東・西)		方位以外 形状 ※2	資料 上部基礎 杭材料	
○台形は2辺・L字・コ字はそれぞれ併記						N-〇° -E/W					
31	10.1	SK06	土坑	3.46	0.90	0.35	N-79° -W	6			
58	11.7	40号墓南	土坑	1.60	0.45+	0.12	N-84° -E	3			
32	10.2	03号墓	甕棺	3.18	1.70-2.10	上0.45 底0.38	N-123° -W	2		竈跡大 縮小	
34	10.3	13号墓	甕棺	2.98	2.00	上0.36 底0.26	N-122° -W	2直角		竈跡大 縮小	13号墓との切りあい不明
35	10.4	24号墓	甕棺	3.84	2.27	上0.63 底0.43	N-105° -W	1		竈跡大 縮小	
38	10.5	28号墓	甕棺	1.38	1.37	上0.11 底0.55	N-69° -E	1		方形基礎 縮小	
40	10.6	30号墓	甕棺	1.89	1.31-1.74	上0.28 底0.71	上N-86° -E 底N-121° -W	3 2		方形基礎 縮小	31号墓との切りあい不明
42	10.7	51号墓	甕棺	推定1.80	1.53	上0.33 底0.47	上N-84° -E 底N-96° -E	3 2	6直角	方形基礎 縮小	
44	10.8	55号墓	甕棺	1.99	1.47	上0.36 底0.37	上N-80° -E 底N-98° -E	2 2	6直角	方形基礎 縮小	
46	11.1	15号墓	甕棺	2.24	1.04	上0.11 底0.23	N-149° -E	2直角		甕棺基礎 縮小	
48	11.2	17号墓	甕棺	2.19	1.11	上0.12 底0.21	N-119° -W	2		甕棺基礎 縮小	16号墓との切りあい不明
50	11.3	20号墓	甕棺	2.09	1.35	上0.30 底0.10	N-69° -E	1		甕棺基礎 縮小	
52	11.4	22号墓	甕棺	上2.41 底1.70	上1.15 底1.15	上0.01 底0.22	N-110° -W	1		甕棺基礎 水平	21号墓の前面落ち込みを切る
54	11.5	29号墓	甕棺	2.44	推定1.35	上0.19 底0.35	N-151° -E	2		甕棺基礎 縮小	
56	11.6	39号墓	甕棺	2.28	1.11	上0.08 底0.75	上N-83° -E 底N-94° -E	3 3	6直角	甕棺基礎 縮小	
58	11.7	40号墓	甕棺	1.66	残0.53	上0.08 底0.08	上N-101° -E 底N-128° -E	6直角 2		甕棺基礎 水平	
60	11.8	46号墓	甕棺	1.80	1.20	上0.14 底0.56	N-36° -E 底N-62° -E	4 2		竈長基礎 縮小	
62	12.1	07号墓	甕棺	1.29	0.85	上0.04 底0.52	N-109° -W	1		基礎小・不明 急傾斜	
64	12.2	18号墓	甕棺	1.55	1.47	上0.36 底0.39	N-67° -E	1		基礎小・不明 急傾斜	
66	12.3	26号墓	甕棺	1.45	1.01	上0.06 底0.30	N-134° -W	5		基礎小・不明 急傾斜	
68	12.4	35号墓	甕棺	1.67	1.06	0.18	N-124° -W	2		基礎小・不明 急傾斜	34号墓を切る
70	12.5	54号墓	甕棺	2.09以下	1.03	上0.25 底0.60	N-62° -E	2		基礎小・不明 急傾斜	
72	12.6	56号墓	甕棺	1.65	1.03	上0.20 底0.42	N-112° -W	2		基礎小・不明 急傾斜	
74	4.3	10号墓	甕棺	残0.83	1.10	底0.54	N-95° -W	3		不明 急傾斜	60号墓に埋められる
76	12.7	21号墓	甕棺	残1.15	残0.72	底0.33	N-116° -E	4直角		不明 急傾斜	
78	12.8	25号墓	甕棺	残0.78	残0.58	底残0.40	N-67° -E	1		不明 急傾斜	
80	13.1	52号墓	甕棺	1.07	0.97	1.07	N-113° -W	2		不明 急傾斜	
82	13.2	SK20	甕棺	残0.80	残0.74	上0.02 底0.18	N-32° -E	2		不明 急傾斜	当初別蔵土坑と考えられていた
84	13.3	50号墓	甕棺	0.96	0.79	0.26	N-160° -E	2	1直角	内 砂小 水平	
28	8.7	59号墓	甕棺	残0.19	残0.17	0.10	(N-86° -E) (E)	1		不明 急傾斜	道物の残存から59号墓を切るか
88	13.4	SK08	土坑	1.00	0.8+	0.16	N-64° -E	—			SK09との切りあい不明
88	13.5	SK21	土坑	1.65	1.23	0.23	N-10° -W	—			
90		SK07	土坑	1.27	0.70	0.13	N-57° -E	—			
88	13.4	SK09	土坑	残1.03	1.05	0.11	N-25° -W	—			SK08との切りあい不明
90	13.6	SK10	土坑	1.02	0.51	0.14	N-88° -W	—			
90	13.7	SK11	土坑	0.90	0.80	0.26	N-71° -E	—			
90		SK12	土坑	1.48	1.00+	0.33	N-15° -E	—			SK01との切りあい不明
90	13.8	SK13	土坑	2.00	1.48	0.09	N-21° -E	—			
6		F 01	小穴	0.20	0.20	0.15	—				
		F 02									SB04へ
		F 03									SB04へ
		F 04									欠番

表1 遺構一覧表 4

陣 所	国 名	遺 構	規 模 (m)			方 位	基 群		備 考	
			辺長 最大値	軸長 最小値	短軸 (検出 面、底面)	長軸 (電軸) 基面・費	方位 分類 第1	費相以外 形状 第2		費相 上部基群 四角計
			○台形は2辺・L字・コ字はそれぞれ併記				N-○°-E°W			
		P 05							SB04へ	
		P 06							SB04へ	
		P 07							SB04へ	
		P 08	小穴	0.20	0.20	0.28	—			
		P 09	小穴	0.60	0.40	0.31	—			
		P 10	小穴	0.60	0.45	0.25	—			
		P 11	小穴	0.60	0.43	0.24	—			
		P 12	小穴	0.40	0.40	0.24	—			
		P 13	小穴	0.30	0.30	0.15	—			
		P 14	小穴	0.25	0.20	0.13	—			
		P 15	小穴	0.35	0.30	0.27	—			
		P 16	小穴	0.50	0.40	0.25	—			
		P 17	小穴	0.55	0.45	0.18	—			
		P 18	小穴	0.50	0.45	0.24	—			
		P 19	小穴	0.50	—	0.07	—			
		P 20	小穴	0.45	0.35	0.17	—			
		P 21	小穴	0.42	—	0.22	—			
9		P 22	小穴	0.60	0.35	0.24	—			
		P 23	土坑	1.40	0.50	0.22	N-72°・W			
		P 24	小穴	0.60	0.40	0.17	—			
		P 25	窪込み	—	0.75	0.08	—		SD01との切りあい不明	
		P 26	小穴	0.50	0.45	0.35	—			
		P 27	小穴	0.55	0.50	0.74	—			

※1 方位の分類は平均で以下の通り(遺構で基群が分かるものはそれで計算、北から東への角度に換算している)

1 N-70° (+5 ~ -3°) 2 N-59° (+5 ~ -4°) 3 N-84° (+2 ~ -5°)

4 N-33° (+3 ~ -7°) 5 N-46° (+3 ~ -5°) 6 N-16° (+6 ~ -3°)

直角は北東-南西軸に対してのもの

○ は計測が難しいもの

※2 基群形状の二段Aは小口に段があるもの、ないものが二段B

一	製 存	地 主
---	-----	-----

[illegible]

姓名	职务
----	----

- 71 -

表2 遺物観察表 3

種別	図版	遺物上	発掘調査	出土層	出土品	法線 (cm)	口徑	底径	高さ	重量	存在	出土	調査				備考
													外面	内面	底面	外面	
77期	21号墓	R138	角生土層	—	—	12.8	64.2	1/4	—	—	—	～1.5mmの砂を含む 片岩、石	ハケメ 工具に	ハケメ ナデ	未調査	にない	K e - K V ?
79期	25号墓	R108	角生土層	—	—	15.2	80.5	1/2	—	—	—	～3mmの砂を多く含む 片岩	タタキ等ハケメ	ハケメ	ハケメ後ナデ	角岩	K V e
81期	52号墓	R115	角生土層	—	—	65.0	11.8	33.0	1/3	—	—	～1mmの砂を含む 片岩等	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ ナデ	ハケメ	にない	K III
81期	52号墓	R149	角生土層	—	—	62.4	—	12.0	116.0	9/10	—	～2mmの砂を含む 片岩等	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ ナデ	ハケメ	にない	K III a
85期	50号墓	R121	角生土層	—	—	12.8	69.4	1/1	—	—	—	～3mmの砂を含む 片岩、石	ナデ	ナデ	未調査	にない	角生土層 砂礫層 厚さ約20cm 33・38号墓で掘り上げられ、33・38号墓の層位に近い
84期	50号墓	R120	角生土層	—	—	28.6	7.2	28.4	1/1	—	—	～1mmの砂を含む 片岩等	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ ナデ	ナデ	角岩	K III c に併行
85期	50号墓	R141	角生土層	—	—	7.4	12.2	4/5	—	—	—	～2mmの砂を多く含む 片岩	ハケメ?	ナデ	ナデ?	角岩	角生土層 外面 砂礫層
86期	50号墓	R123	角生土層	—	—	24.3	61.0	1/10	—	—	—	～1mmの砂を含む 片岩等	ハケメ	工具によるナデ	ナデ	角岩	角生土層 外面 砂礫層
86期	50号墓	R119	角生土層	—	—	45.0	61.0	1/5	—	—	—	～1mmの砂を含む 片岩等	ハケメ	工具によるナデ	ナデ	角岩	角生土層 外面 砂礫層
86期	50号墓	R122	角生土層	—	—	15.0	61.0	1/10	—	—	—	～1mmの砂を少なく含む 片岩	ナデ	ナデ	未調査	角岩	角生土層 外面 砂礫層
87期	17号墓	R102	石張り	—	—	9.5	—	3.6	0.8	32.7 g	—	片岩				角岩	角生土層 外面 砂礫層
87期	17号墓	R101	石張り	—	—	3.2	—	2.3	2.9	0.3g	—	片岩?				角岩	角生土層 外面 砂礫層
87期	20号墓	R109	角生土層	—	—	34.9	—	3.8	10.8	1/9	—	～1mmの砂を含む 片岩、石	ハケメ ナデ	ヨコナデ	ナデ	角岩	角生土層 外面 砂礫層
88期	50号墓	R120	角生土層	—	—	—	—	4.4	10.8	1/4	—	～3mmの砂を多く含む 片岩、石、白色砂等	ヨコナデ ユビサ	ナデ ユビサ	ナデ	角岩	角生土層 外面 砂礫層
89期	50号墓	R118	角生土層	—	—	6.2	6.4	1/1	—	—	—	～3mmの砂を多く含む 片岩、石、白色砂等	ハケメ後ナデ?	ナデ	ナデ	角岩	角生土層 外面 砂礫層
89期	50号墓	R119	角生土層	—	—	7.5	15.2	1/3	—	—	—	～3mmの砂を多く含む 片岩、石、白色砂等	ハケメ	不明	不明	角岩	角生土層 外面 砂礫層
89期	50号墓	R125	角生土層	—	—	16.2	13.1	1/1	—	—	—	～3mmの砂を少なく含む 片岩、石、白色砂等	ナデ	ナデ	ナデ	角岩	角生土層 外面 砂礫層
89期	50号墓	R121	角生土層	—	—	7.4	10.8	1/4	—	—	—	～1mmの砂を含む 片岩、角岩	ナデ、地文	ナデ	ナデ	角岩	角生土層 外面 砂礫層
89期	50号墓	R120	角生土層	—	—	5.3	10.8	1/4	—	—	—	～1mmの砂を含む 片岩、角岩	ヨコナデ ナデ	ナデ	ナデ	角岩	角生土層 外面 砂礫層
89期	50号墓	R126	角生土層	—	—	21.7	—	4.0	10.8	1/8	—	～1mmの砂を含む 片岩、角岩	不明	不明	不明	角岩	角生土層 外面 砂礫層
89期	50号墓	R125	石張り	—	—	21.2	—	14.1	4.0	1.33kg	—	角岩				角岩	角生土層 外面 砂礫層
89期	50号墓	R121	角生土層	—	—	24.7	—	15.4	10.8	1/1	—	～3mmの砂を多く含む 片岩、石、角岩	ヨコナデ ナデ	ナデ	ナデ	角岩	角生土層 外面 砂礫層
89期	50号墓	R123	角生土層	—	—	—	—	3.3	10.8	1/4	—	～1mmの砂 3～5mmの砂を含む 片岩等	ハケメ後ヨコナデ	ナデ	ナデ	角岩	角生土層 外面 砂礫層
89期	50号墓	R121	角生土層	—	—	6.9	6.9	1/1	—	—	—	～1.5mmの砂を多く含む 片岩、石、角岩	ハケメ	ナデ	ナデ	角岩	角生土層 外面 砂礫層

※ 発掘の時期については 横口遺址 2005『発掘と発掘時代年代論』を参考させていただいた

図版

PLATES

〈凡例〉

遺物写真のキャプションは、以下の通りである。



遺構名

図番号



1. 調査地全景
北東から
中央は二反田
遺跡
奥は宮ノ前
遺跡



2. 調査区全景
北から



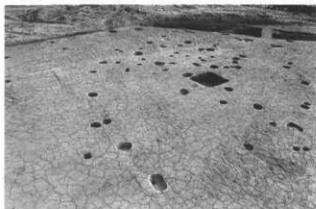
1. 調査区全景 南西から



2. 調査区全景西側 東から



3. SB04 北から



4. SB05 周辺 北西から



5. SB01 西から



6. SB02 南から



7. SK03 南から



8. SB02 切欠断面 南から

図版 3



1. SK01

南西から



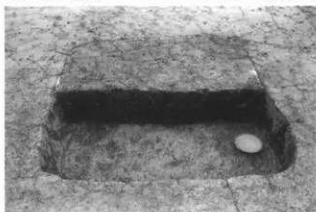
2. SK01 断面

6-1-17 南東から



3. SK02

南西から



4. SK02 断面

東から



5. SK25

北から



6. SK24

北から



7. SX01

東から



8. SD01 断面 B-B'

西から



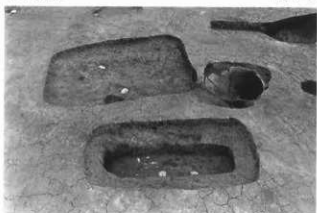
1. 墓群

西から



2. 墓群

北東から



3. 60・10・12号墓

南から



4. 60号墓断面

西から



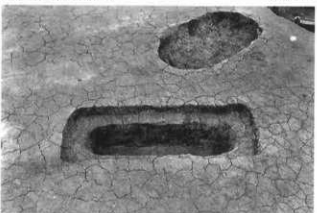
5. 12号墓断面

東から



6. 45号墓

北東から



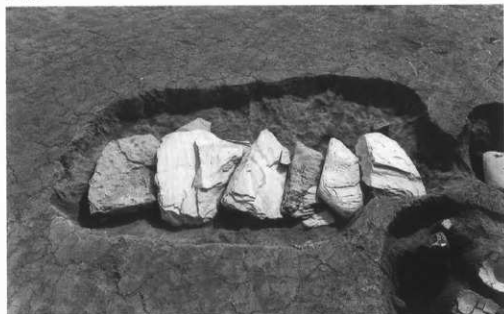
7. 01号墓

北東から



8. 01号墓断面

北西から



1. 47号墓石蓋
北から



2. 48号墓石蓋
北から



3. 32号墓
北東から



1. 47号墓石棺

北から



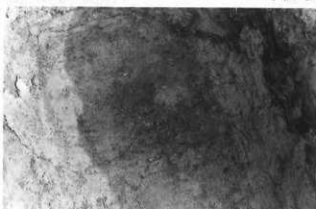
2. 47号墓東小口

西から



3. 48号墓

北から



4. 48号墓赤色顔料

西から



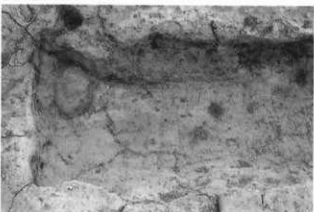
5. 32号墓鉛棺

北東から



6. 19号墓

北西から



7. 06号墓赤色顔料

北から



8. 06号墓断面

東から



1. 14号墓

北西から



2. 14号墓石版

南から



3. 27号墓

北から



4. 27号墓西小口

北東から



5. 08・09号墓

東から



6. 02号墓

南から



7. 38号墓

北西から



8. 43・42・41号墓・SB03

東から



1. 11 号墓

南から



2. 44 号墓

北東から



3. 49 号墓・SK17

東から



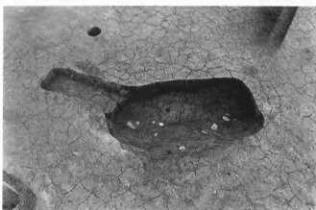
4. 53 号墓

北東から



5. 57 号墓

北から



6. 05・04 号墓

南から



7. 23・59 号墓

東から



8. 37・36 号墓

北西から

図版 9



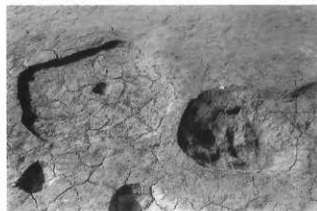
1. 58号墓

北から



2. SK14

北西から



3. SK23・15

東から



4. SK16

東から



5. SK19

北西から



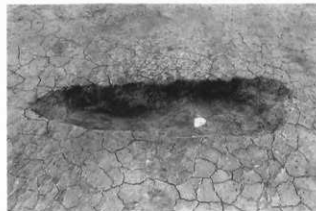
6. SK22

北西から



7. SK04

北から



8. SK05

北西から



1. SK06

北から



2. 03号墓

北西から



3. 13号墓

北西から



4. 24号墓

北から



5. 28号墓

北から



6. 30・31号墓

北から



7. 51号墓

北から



8. 55号墓

南から



1. 15号墓

北東から



2. 17・16号墓

北から



3. 20号墓

北から



4. 22号墓

北から



5. 29号墓

北から



6. 39号墓

北から



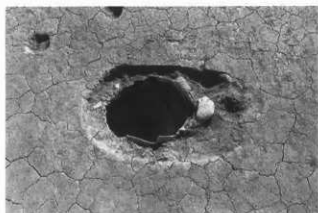
7. 40号墓

南から



8. 46号墓

北から



1. 07号墓

北から



2. 18号墓

北から



3. 26号墓

北西から



4. 34・35号墓

北から



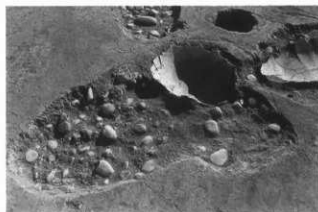
5. 54号墓

北から



6. 56号墓

南から



7. 21号墓

北から



8. 25号墓

南から



1. 52号墓

北から



2. SK20

東から



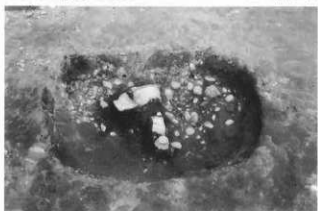
3. 50号墓・SK18

北から



4. SK08・09

東から



5. SK21

西から



6. SK10

北から



7. SK11

北西から



8. SK13

東から



1. SB03

12 図 1



2. SB03

12 図 2



3. SK02

12 図 6



4. SK01

12 図 3



5. SK01

12 図 4



6. SK01

12 図 5



7. SK03

12 図 7



8. SK03

12 図 8



9. SK25

12 図 11



10. SK25

12 図 12



11. SK25

12 図 13



1. SK24



2. SD01 上層



3. SD01 上層

12 図 9,10

14 図 1,7,8

14 図 2,3



4. SD01 上層



5. SD01 上層



6. SD01 上層

14 図 4,5,6

14 図 9,10



7. SD01 上層



8. SD01 上層



9. SD01 上層

14 図 12,15

14 図 13,16



10. SD01 下層



11. SD01 下層



12. SD01 下層

15 図 1,11

15 図 2

15 図 3



1. SD01 下層

15 图 4



2. SD01 下層

15 图 5



3. SD01 下層

15 图 6,10



4. SD01 下層

15 图 7,8



5. SD01 下層

15 图 9



6. SD01

15 图 12



7. SD02

15 图 13



8. P14

16 图 1



9. P25

16 图 2



10. 45 号墓

22 图 1



11. 45 号墓

22 图 2,3,4,5



1. 32号墓



2. 03·14号墓



3. 20号墓

87图3



27图1 4. SK08·21



89图1,10 5. SK21

89图11



6. SK08

89图3,2



7. SK21

89图9



8. SK17



89图4 9. SK17



89图5,7,6 10. SK17

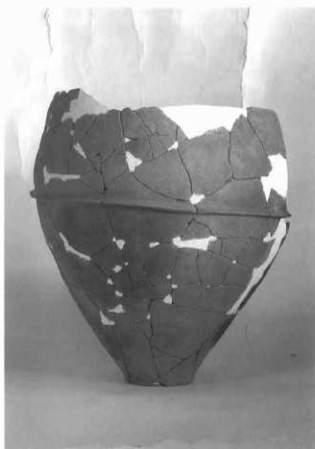
89图8



1. 24号墓



37图1



3. 51号墓

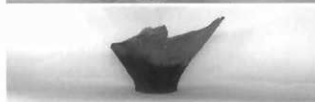
43图1



2. 24号



37图2



4. 51号墓

43图2



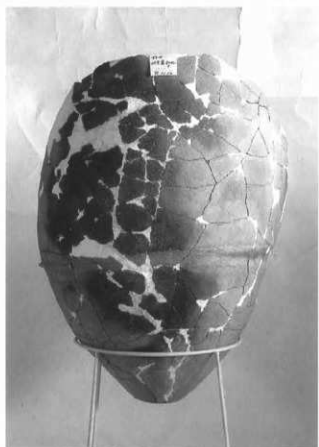
1. 55号墓

45图1



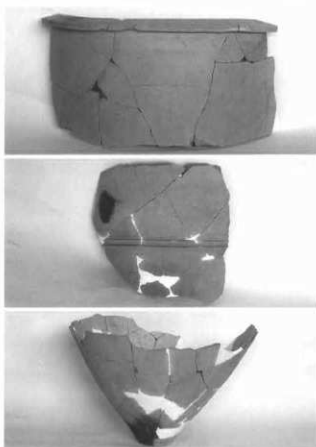
2. 29号墓

55图2



3. 25号墓

79图1



4. 52号墓

81图2

報告書抄録

ふりがな	やめしなしいせきぐん14							
書名	八女市内遺跡群14							
副書名	福岡県八女市緒玉所在 野田遺跡発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	八女市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第122集							
編著者名	多賀 晴司 (たが せいじ)							
編集機関	八女市教育委員会							
所在地	〒834-8585 福岡県八女市本町647 TEL. 0943-23-1982 FAX. 0943-24-4331							
発行年月	西暦 2018年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 : 遺跡番号		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積	調査原因
のだいせき 野田遺跡	ふくおかけんやめし 福岡県八女市 おたまあざのだ 緒玉字 野田	402109	6010	33 11 52	130 33 09	19901119 ～ 19910118	約2200㎡	園地整備 事業
所収遺跡名	種 別	主な時代		主な 遺 構		主な 遺 物		特 記 事 項
野田遺跡	墓 地 集 落 跡	弥生時代 古墳時代 奈良時代		箱式石棺墓・甕棺墓・ 土塋墓・溝・土坑 掘立柱建物・竪穴建物		甕棺・弥生土器・ 青銅器銚・磨製石鏃 土師器・須恵器		
要 約	発掘調査の結果、古代では掘立柱建物2棟、竪穴建物2軒、竪穴建物の可能性があるもの1基、土坑5基、古代から弥生時代中期後半の溝1条、弥生時代中期後半から古墳時代前期初頭の墓群(箱式石棺墓1基、石蓋土塋墓2基、木棺墓があるもの1基、木蓋土塋墓3基、木蓋土塋墓の可能性のあるもの2基、甕棺墓28基、土塋墓24基の計61基)、円形周溝状遺構?1基、弥生時代中期前半の土坑が2基確認された。ほか時期不詳の土坑20基、溝状遺構1条、ほか多数の小穴、落ち込みが見つかった。 八女市域で弥生時代の墓群または列状に分布するものはほかに10遺跡ほどある。32号墓で青銅器の銚、14号墓で磨製石鏃の副葬がある。市域では副葬があった墓は7基が知られている。本遺跡は弥生時代の墓制についての良好な資料となりうる遺跡である。今後の研究に期待したい。 奈良時代において本遺跡を含む周辺においても遺構が見つかった。遺跡間を通して地域の歴史を考えることができるようになってきていると思われる。							

※座標は世界測地系による。国土地理院ホームページの地図検索システムより得たものであり、基準点測量によって得た値ではない。

八女市内遺跡群 1 4
八女市文化財調査報告書
第 1 2 2 集

平成30年3月31日

発 行 八女市教育委員会
八女市本町 6 4 7
印 刷 (株) 東 兄 弟
八女市新神院 5 6 3